大阪府埋蔵文化財調査報告2009－5

若宮遺跡

－泉佐野駅前交番新築工事に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

若宮遺跡

－泉佐野駅前交番新築工事に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

序　文

本書で報告いたします若宮遺跡は、南海本線泉佐野駅周辺から孝子越街道にかけて広がる遺跡です。このたび大阪府泉佐野警察署泉佐野駅前交番新築工事に伴い、発掘調査を同遺跡内で実施いたしました。

今回の調査地は、南海泉佐野駅前に位置しています。調査面積は100㎡に満たないほど狭小なものでしたが、過去の土地利用の状況が明らかになりました。

調査地の周辺では、旧石器時代以来、今日に至る人々の暮しの痕跡が、濃淡はありますが垣間見ることができます。そうした歴史の中でことに重要な変換点は、大福二（1234）年の官宣旨によりなされた日根荘の開発です。こののち中～近世を通じて、水田開発は海岸部方面に拡大され、近世前半期にはその波が調査地周辺にも及びます。

こうした水田開発が進められ、農業が盛んに行われた一方、調査地東方に熊野街道、北には紀州へとつながる孝子越街道が通り、人、物、情報が行き交う場所でもありました。その様子は、熊野街道付近に位置する上町遺跡や市場西遺跡などの中世集落、孝子越街道の宿として繁栄した近世の「佐野町場」が如実に物語っています。ことに「佐野町場」は、江戸時代中頃には泉州地域においては堺に次ぐ繁栄を誇り、食野家や唐金家をはじめとする豪商たちが生まれました。今回の調査地は二つの街道の中間に位置していて、中世以来のそうした歴史的変遷の一端をうかがい知る調査成果を得ることができました。

調査にあたりましては、関係各位から多大なご指導、ご助力をいただき、厚く感謝いたしております。今後とも文化財保護行政にいっそうのご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年12月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　言

1．本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が大阪府警察本部より依頼を受けて実施した泉佐野市1192番地所在若宮遺跡の発掘調査報告書である。
2．現地調査は、文化財保護課調査第二グループ主査三木弘が担当し、平成21年５月11日から同月27日に実施した。遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩・副主査藤田道子を担当として、平成21年度に実施した。
3．本調査の調査番号は09005である。
4．本調査の基準点測量は株式会社ＧＩＳ関西に委託した。
5．出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
6．本書の編集・執筆は三木が行った。
7．調査の実施にあたっては、泉佐野市教育委員会の鈴木陽一、中岡勝、貝川克上、大矢祐司、渡辺晴香各氏の援助を得た。記して感謝します。
8．発掘調査・遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府警察本部が負担した。
9．本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は497円である。

本　文　目　次

序文　　大阪府教育委員会事務局文化財保護課　野口雅昭
例言
Ⅰ　若宮遺跡の立地環境と歴史
　1　若宮遺跡の立地環境……1
　2　遺跡地周辺の歴史……2
Ⅱ　調査の成果
　1　調査の経緯と経過……6
　2　基本層序……6
　3　発掘調査の成果……8
　4　出土遺物……11
Ⅲ　まとめ－「佐野町場」周辺の水田開発－
　1　若宮遺跡における既往の調査……16
　2　「佐野町場」周辺の微地形と水路……28
　3　「佐野町場」周辺の溜池……31
　4　「佐野町場」周辺の水田開発……37
遺物観察表……14

Ⅰ　若宮遺跡の立地環境と歴史

1　若宮遺跡の立地環境

若宮遺跡は泉佐野市若宮町に位置する。遺跡は南海本線泉佐野駅の周辺に当たり、その範囲はおおよそ線路と孝子越街道（つばさ通り）の間に該当する。東西750ｍ、南北300ｍほどの広さを測る。本調査地は、若宮遺跡の南端に位置している。

この若宮遺跡は、海岸線に沿った沖積平野の南方に広がる中位段丘面に立地している。中位段丘面は、和泉山脈の前山から派生する檀波羅丘陵の南西裾際から北は丘陵に沿い、南は樫井川と平行するように広がっている。その表層には、締まりのある黄褐色粘土が覆っている。

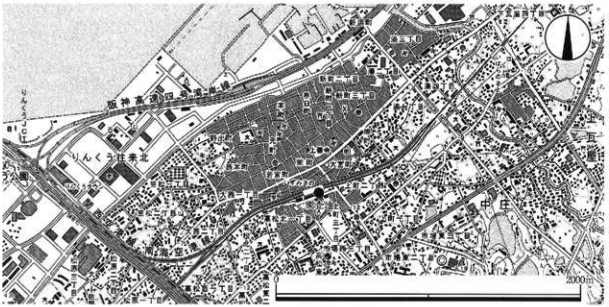
この遺跡の基盤層に当たる中位段丘面の表層部は、調査地周辺では東から西方向に下降し、とくに調査地の約600ｍ以西で顕著となる。これは、中位段丘面が南方に後退しているためである。

中位段丘面と樫井川の間には、低位段丘面が広がる。また佐野川両岸にも低位段丘面が広がっているが、その範囲は限られている。

檀波羅丘陵は、海岸方向に当たる北西に緩やかに下降しながら舌状に延び出ている。調査地の周辺では檀波羅丘陵を除くと、丘陵・最上位段丘は存在しない。この周辺よりも小高く、かつ緩傾斜する丘陵の存在が、調査地周辺における水田開発の自然地形上の鍵である。

沖積平野はおよそ300～400ｍの幅で、海岸線に沿って広がっている。中位段丘面との境には、かつての海岸線の名残である段差が生じている。

そして「佐野町場」は、南半が中位段丘面、北半が沖積平野に形成されていて、町場を貫く孝子越街道は沖積平野との境より100ｍほど中位段丘面内に位置している。町場を離れた南では、街道は一部沖積平野に位置することもあるが、しばらくは中位段丘面の端近くを走っている。



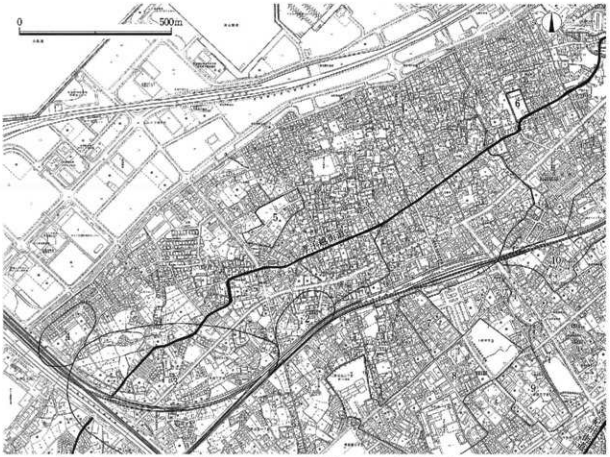
第１図　調査地の位置

2　調査地周辺の歴史

若宮遺跡は近世の「佐野町場」およびその周辺にひろがる生活・生産域である。この遺跡周辺における大きな歴史的画期は、鎌倉時代前葉の日根荘の開発である。日根荘は天福２年（1234）に九条家の発議により本格的な開発が始まり、中世を通じて地域一帯の重要な生産拠点であった。これ以前にも、高野山や在地寺院である禅興寺によって開発が行われていて、九条家の開発は寺院の既開発地を除く範囲での荒地開拓であった。

荘域は泉佐野市の北西部を除いたほぼ全域に相当し、海岸部から山間部までの広域にわたる。初期の段階で開発を請負ったのは僧実専や久米田寺であった。日根荘には日根野村、入山田村、井原村、鶴原村が含まれ、室町時代には上之郷村にも及んでいる。

調査地の東約１kmには檀波羅密寺が存在していた。荘園領主の九条家との結び付きが強い大寺院であった。発掘調査により、区画溝、井戸、池、土壙墓などが発見され、多数の焼けた瓦が出土している。創建は平安時代にまで遡ると推測されていて、応永の乱（応永６年（1399））の戦火を蒙るまでは権勢を誇り、地域において強い求心力をもっていたと考えられ、当地域を考える上で重要な寺院である。



1　若宮遺跡　2　大西遺跡　3　中開遺跡　4　松原遺跡　5　大場遺跡
6　新町遺跡　7　若宮南遺跡　8　上町遺跡　9　市場西遺跡　10　上町東遺跡

第２図　調査地周辺の遺跡

さらに、池跡の覆土からは近世の陶磁器や瓦などが出土していて、江戸時代においても何らかの施設が存在したとみられている。

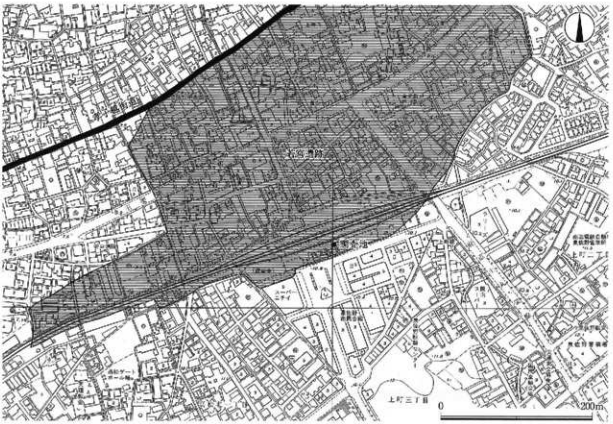
なお「檀波羅密寺」と刻まれた瓦が、この寺跡のほか、湊遺跡、若宮遺跡、上町遺跡など比較的広い範囲で見つかっている。

ところで中世における地域興隆の重要な鍵のひとつは、本調査地の南約700ｍを北東から南西に走る熊野街道である。この街道に沿って市が開かれ、集落が形成された。ただし、熊野街道に直接面する市場東遺跡での遺跡様相が不明確である。これに対して、街道より250ｍほど奥に入った上町遺跡や市場西遺跡の様相は、そうした状況を間接的に反映している。また南北朝時代の創建とされる妙光寺の存在は重要である。

いまのひとつ鍵は、鎌倉時代の遺構が検出される若宮遺跡や湊遺跡、上町東遺跡などから窺われるように、孝子越街道あるいはその前身の海岸沿いの街道である。しかも遺跡の形成時期からすると、孝子越街道周辺の開発の方が熊野街道周辺よりも早く、鎌倉時代前半期には集落の形成が既に始まっていたとみられる。

上町東遺跡では、平安時代の遺構も存在しているが、13世紀前葉～14世紀に形成された集落が中心である。そして15世紀後葉には衰退する。

この遺跡では、屋敷地は溝で囲まれ、その内に掘立柱建物、柵列、井戸、土壙墓などが設けられた。建物は複数回の造り替えがあり、数時期にわたって継続していた。この集落の屋敷は、主に40～55㎡ほどの板床貼りの主屋建物とそれに附属する１～２棟の小型建物からなっていて、



第３図　若宮遺跡と調査地

建物方向を揃えた計画的な集落形成がなされていたとみられる。また木製櫛の未製品、鞴の羽口・坩堝・鉄滓などが出土していて、集落内には各種の職人が居住していたと推測する。さらに、蛸壺焼成土坑も発見されていて、漁撈従事者あるいは漁撈具生産に携わる者の存在も窺われる。

なお上町東遺跡の山教委97－3区C区SE01から表に「□市場四郎兵衛」、裏にも2～3文字が認められる墨書木簡が出土した。井戸の時期は近世に下るが、この遺跡付近も「市場」と呼称されていた可能性がある。

上町東遺跡の東に位置する湊遺跡では奈良～平安時代の建物などが発見されていて、10世紀後半までに一定の集落形成が行われている。しかしその状況は、極めて「散村」的だといわれている。13～14世紀になると集落形成はさらに進み、集落域を画する溝をはじめ、掘立柱建物、柵列、溝、土壙墓などが検出されている。

さらに、市教委92－2区では覆屋をもつ工房を推測させる土坑が存在していて、そのうちの1基からは烏帽子が出土している。また木製櫛の未製品が多量に出土した井戸があったりして、ここでも集落内に職人が存在していた可能性が高い。

熊野街道付近に位置する遺跡としては、調査地の周辺では、既述したように上町遺跡、市場西遺跡、市場東遺跡があがる。

上町遺跡は若宮遺跡の南約200ｍに位置している。14世紀に集落形成が始まり、15世紀に盛行する。1987年の（財）大阪府埋蔵文化財協会による発掘調査以来、これまで40区画以上の屋敷地が検出されている。屋敷地は1辺20～45ｍ強、400～1850㎡程度の広さであり、平均的には1辺30ｍ、1000㎡ほどである。

屋敷地群は、現在の府道泉佐野停車場線に延びる市道の東沿いおよびそれと直交する市道上町末広線沿いに展開している。しかも前者の屋敷地群と道を挟んで妙光寺が位置している。このことから、妙光寺の門前に屋敷地が形成された可能性が考えられる。

屋敷地内には掘立柱建物、井戸、溝などが設けられ、土壙墓や祭祀遺構とみられる土坑が存在した屋敷もあった。また礎石建物の存在も指摘されている。

さらに「のいね一斗五升」「二廿八かせう」と表裏に記された荷札が出土していて、陸稲が嘉祥寺の村から佐野に運ばれたことを知ることができ、上町遺跡の集落に商人が居住していたと推定することができる。

市場西遺跡は上町遺跡の南東に接して位置している。この遺跡における集落形成も上町遺跡とほぼ同様で、14世紀前半に始まり、14世紀後半に本格化し、15世紀に盛行期を迎える。これまで、不明確なものも含めて10区画ほどの屋敷地が確認されている。

遺跡からは多量の遺物が出土していて、その中には木製櫛の未製品も含まれている。櫛の未製品は湊遺跡や上町東遺跡でも出土しており、佐野村の広い範囲で生産が行われていたとみられる。また市教委92－1区では備前壺、瀬戸小皿・折縁深皿・天目茶碗、青磁碗・青磁花瓶などが出土していて、比較的上層に属する居住者が存在していたと想定されている。

熊野街道が横断する市場東遺跡であるが、そこにおける集落の様相は明確ではない。包含層中から瓦器が出土していることから、平安時代後葉～鎌倉時代前半に周辺開発が進められたと推定できるに留まる。

本調査地が位置する若宮遺跡の様相については改めて後述するが、湊遺跡や上町東遺跡と同様に、13世紀後葉から集落形成が始まり、14世紀に入って本格化する。そして中世を通じてその状況が継続され、さらに上町遺跡が中世末に衰退するのとは対照的に集落形成が保たれ、近世の「佐野町場」へと繋がっていくことを確認しておく。

若宮遺跡の西に接する大西遺跡では、近世の耕地開発の影響を受けて、それ以前の時代の遺構の多くが消失しているが、断片的に中世後期の溝や土坑が検出され、また包含層中にも13～15世紀の遺物が存在していることから、若宮遺跡とともに中世前葉には一定の開発が行われたとみられる。また近世の遺構としては、耕作土や水田区画が多くの調査地点で確認されるほか、井戸、溝、土坑が主流であることから、遺跡範囲内の大半は「佐野町場」外縁部の耕作域に当たっていると考えられる。

若宮遺跡の北西200ｍに位置する大場遺跡では、龍泉窯青磁や白磁をはじめとする中世の遺物が出土しているが、主流となる遺構・遺物は近世のものである。この遺跡では「佐野町場」の南限（和歌山側）を画するとみられる水路や護岸の石列が発見されている。さらに埋桶や素掘り井戸も見つかっていて、遺跡が町場縁辺から耕作域にかかる範囲に当たっているとみられる。

出土遺物の中には13世紀のものも含まれていることから、海岸部寄りの他の遺跡と同じ時期に開発が始まったと推測できる。

若宮遺跡の西約１㎞に位置する松原遺跡は、近代までは湿潤な低地であったとみられているが、中世に遡るとみられる溝や落ち込みが存在し、また部分的に中世遺物の包含層も認められ、後述する中開遺跡との関係も指摘されている。このように中世段階における生活圏の広さを窺うことができる一方、近世においても土地の不安定な状況は継続していて、水利施設が整備される近代まで、この遺跡付近の開発は進んでいなかったと考えられる。

松原遺跡の南に隣接して中開遺跡が存在する。若宮遺跡とは、最短で250ｍの距離にあり、両遺跡に挟まれて大西遺跡が位置する。この中開遺跡を横断するように孝子越街道が延びている。遺跡の範囲が東西700ｍ、南北450ｍに及んでいるため、調査成果を一律に捉えることはできないが、 市教委92－６区では15世紀に比定できる耕作に関連した水溜施設が検出されていて、街道近くの開発が中世に遡る可能性の高いことが窺える。一方、遺跡南端近くの（財）大阪府埋蔵文化財協会による調査では、14世紀の遺物包含層は確認されているものの、遺構の検出はなかった。ただ中世末から近世にかけて耕作地化が進められたことを示すものとして、２基の地鎮土坑の存在があげられる。また遺跡東端を縦断するように進められた埋文協会の調査成果からも、近世後半から近代に耕作地化が進んだとみられる。このように、街道付近は中世後期に開発が始まるが、その縁辺では開発が遅れるという状況を呈している。

Ⅱ　調査成果

1　調査の経緯と経過

南海本線泉佐野駅前の再整備に伴って、大阪府泉佐野警察署泉佐野駅前交番が新築されることになった。交番用地を含む泉佐野駅周辺は、周知の埋蔵文化財包蔵地である若宮遺跡の範囲内に当たっているため、文化財保護課と大阪府警察本部施設課との間で文化財の取扱いについて協議を行った。その結果、工事着手前に文化財調査を行う必要を確認し、平成21年度に調査を実施することとした。

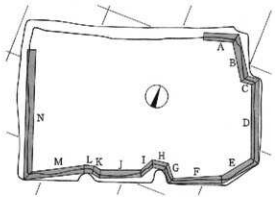
年度当初に警察本部と教育委員会との間で覚書を締結し、現地における発掘調査を5月11日から開始した。発掘調査は同月27日に終了し、その後整理作業、報告書作成作業を行い、平成21年12月に報告書を刊行した。

2　基本層序

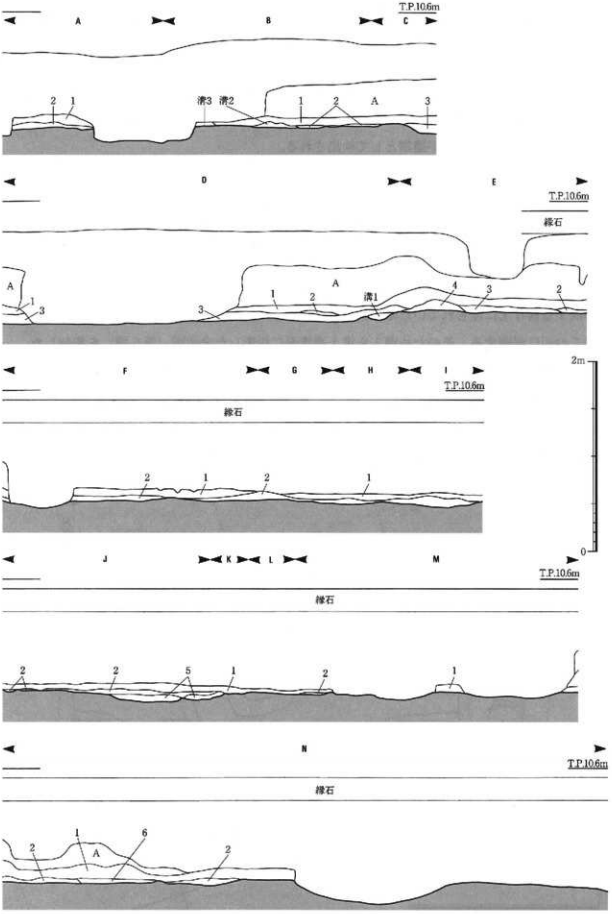
調査地の北西半分に撹乱を受けているほか、旧建物の解体時の掘削が及んでいるなど、調査地の遺存状況は不良であった。したがって基本層序もB～C間、D南東半～E間を除くと第1遺構面まで近年の盛土が及んでいて、さらに場所によっては基盤層まで削平・盛土されていた。

基本層序は現代の盛土、明治30年代の線路敷設に伴う盛土（A）、旧耕作土である灰色砂質土（1層）、旧耕作土に伴う床土（2層）、そして基盤層となる。さらにD範囲では床土の下に暗灰黄色砂質土（3層）が存在していて、1層以前の耕作土とみられる。ただし、3層は基盤層がやや下がった部分のみに堆積し、土層壁面では観察できるものの、面的に捉えることができないことから、1・2層の形成時にほとんどが削平されたと考えられる。なお出土遺物に時期差が認められないことから、1・3層ともに17世紀末～18世紀中葉に比定できる。1層上面を第1遺構面とした。

基盤層は、部分的に礫を含んだ明黄褐色粘質土の洪積層である。この基盤層上面を第2遺構面とした。還元作用を受け、変色した部分が認められた。この面で検出できる遺構は、耕作土形成以前のものであり、大半は近世初頭から17世紀末（～18世紀中葉）に比定できる。



A　明治30年代の線路敷設に伴う盛土
1　灰色(N5/0)砂質土　旧耕作土, 炭化物含む
2　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土　明黄褐色(10Y6/8)粘質土若干混入, 床土, 上部酸化
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土　ややシルト的, マンガン含む, 耕作土
4　灰黄色(10YR5/2)粘質土　畦, 縞りあり, 小礫若干含む
5　黄灰色(2.5Y4/1)砂質土　明黄褐色(10Y6/8)粘質土混入, マンガン含む
6　灰色(N5/0)砂質土　1層に近いが基盤堆土含む, 炭化物少量含む
基盤層　明黄褐色(10YR6/8)粘質土, 部分的に礫含む


T.P.10.6m
A
B
C
2
1
溝3
溝2
1
2
A
3
D
E
T.P.10.6m
線石
A
1
3
A
1
2
溝1
4
3
2
3
F
G
H
I
T.P.10.6m
2m
0
線石
2
1
2
1
J
K
L
M
T.P.10.6m
線石
2
2
5
1
2
1
N
T.P.10.6m
線石
2
1
A
6
2

第4図　基本土層

3　発掘調査の成果

（1）第１遺構面の調査

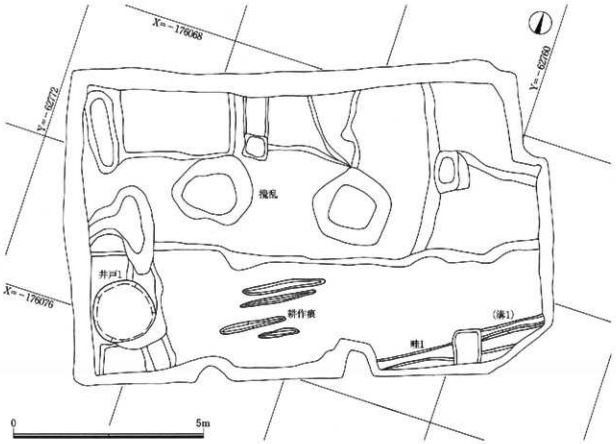
第１遺構面は、17世紀末～18世紀中葉に形成された耕作土上に痕跡を残す遺構の検出面である。したがって、17世紀末から、鉄道線路敷設のための盛土がなされた明治30年代頃までの期間になされた諸活動の痕跡が遺構として検出される。

調査地は約90㎡の狭小な範囲であり、しかも泉佐野市教育委員会が実施した駅前広場整備に伴う発掘調査（若宮遺跡06－２区）による掘削が調査地北西半分に及び、そのほとんどで基盤層以下まで攪乱されていた。そのため遺構検出が可能なのは、調査地の南西半分と北東隅の僅かな部分だけであった。

遺構検出の結果、調査地南東で畦１条（畦１）、その西で耕作痕を検出した。なお第１遺構面を形成する耕作土に埋もれていたため検出できなかった溝１は、畦１に伴う側溝であるので、本来はこの面に帰属する。そのため溝１を第１遺構面に投影した全体図（第５図）を掲載した。

畦１は北東－南西方向に延びていて、これまで周辺の調査で検出された畦や側溝の向きと一致している。小礫を若干混入した灰黄色粘質土で形成されている。

畦の側溝である溝１は、東が調査地外に延び出ているが、現状で長さ2.5ｍ、幅0.2ｍ、深さ７cmを測り、畦の中程で途切れている。ただしこれは、溝上部が削平を受けて、掘方が消失したた



第５図　第１遺構面

めとみられ、本来は畦に沿って掘削されていたと考えられる。覆土はにぶい黄橙色粘シルトの単一層で、炭化物を僅かに含んでいる。出土遺物はなかった。

耕作痕は、4条の細長い溝状の落込みとして残っていた。覆土はいずれもにぶい黄橙色細質砂シルトである。遺物の出土はなかった。

なお調査地の南西隅で素掘りの井戸を検出したが、現代まで使用されたものであった。ただし掘削時期については、それを示す遺物が全く出土しなかったために不明である。

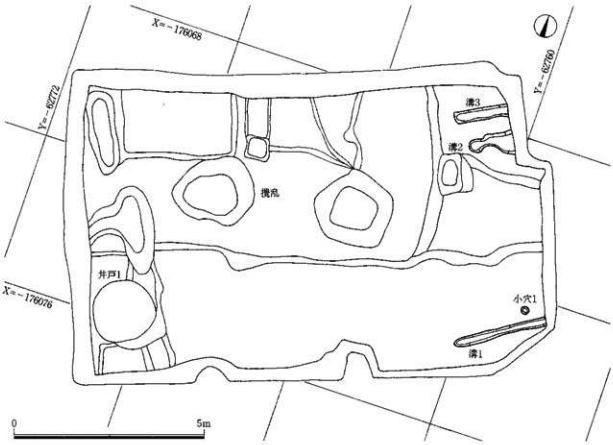
（2）第2遺構面の調査

基盤層上面に対応する遺構検出面である。泉佐野市教育委員会の調査掘削のため、この面でも遺構検出の対象範囲は調査地の約半分にすぎず、よって検出された遺構も数少なかった。

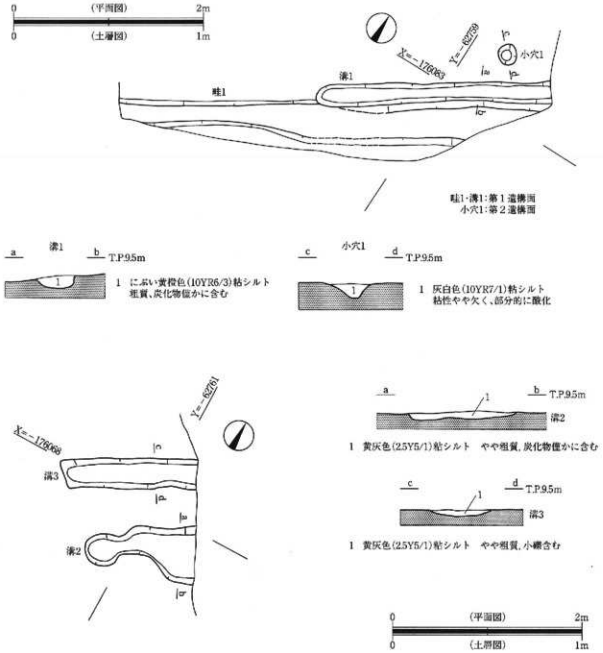
市教委による掘削を免れた調査地北東隅で溝2条（溝2・3）、南西隅で溝1条（溝1）と小穴1基（小穴1）を検出した。このうち溝1は、既述したように本来は第1遺構面に伴うものであった。

溝2と溝3は平行していて、その方向は溝1とほぼ一致している。ともに東が調査地外に延び出ていて、全体の規模は不明であるが、現状では溝2は長さ1.2m、最大幅0.6m、深さ6cm、溝3は長さ1.4m、幅0.3m、深さ4cmを測り、ともに浅い。また溝2は、やや不定な平面形を呈している。

覆土は、溝2が炭化物を僅かに含んだ黄灰色粘シルト、溝3が小礫を含む黄灰色粘シルトで、



第6図　第2遺構面



第７図　検出遺構

それぞれ単一層である。ともに出土遺物はなかった。なお溝２と溝３の間には、基盤層の高まりや盛土は認められないことから、溝間が畦であった可能性は乏しい。

小穴１は直径0.2ｍ、深さ10㎝ほどで、覆土は部分的に酸化した灰白色粘シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

遺物の出土がなかったので、溝２・３および小穴１の形成、あるいは埋没時期は不詳である。ただ、耕作土が形成された17世紀末～18世紀中葉とあまり隔たらない近世前期のものではないかと推測する。さらにいえば、17世紀後半に比定できる一重網目文が描かれた肥前系磁器（第８図２）の時期に、この調査地付近への地形改変がまずなされたと考える。

なお撹乱された部分においては、遺構底部の痕跡を認めることはなかった。

4　出土遺物

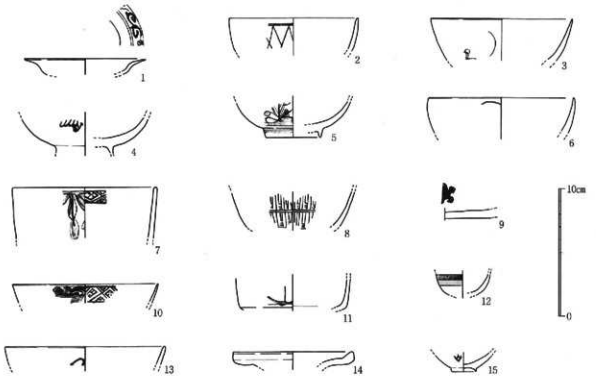
破片数67点の遺物が出土した。そのうち撹乱・盛土から出土したものは12点、耕作土（1～3層）からのものは55点を数える。また前者における種類組成は磁器5点、陶器3点、瓦4点、後者では磁器23点、陶器16点、瓦器1点、土器7点、瓦5点、石製品1点、鉄製品2点である。このうち磁器15点、陶器5点、石製品1点、鉄製品2点を図化し、掲載した。

1～15は磁器である。1は中国製染付磁器で、折縁口縁の小皿である。中国製染付磁器は本調査においてはこの1点のみであるが、（財）大阪府文化財センターが行った調査（若宮遺跡06－1）では複数点が出土していることから、遺跡内においては比較的多くの中国製染付磁器が所有されていたと推定できる。しかも本調査地や若宮遺跡06－1区は「佐野町場」の中心からは外れているので、中国製染付磁器は町場から廃棄されたものである可能性は高く、中世末～近世初頭には町場が一定度の繁栄をなしていたとみることができる。

2は肥前系磁器の中碗である。一重網目文が描かれていて、17世紀後半に比定できる。本調査で出土した時期比定が可能な遺物のうち、上述の中国製磁器を除くと、最も古いものである。

3は波佐見・平戸系のくわらんか手の中碗。18世紀前半に比定できる。この中碗と同じく18世紀前半に位置付けることができるものに、4・5の肥前系の中碗がある。これらは本調査の出土遺物の中では比較的古い。4にはコンニャク印判による菊花文が描かれている。

6は波佐見・平戸系の中碗で、18世紀中～後葉に比定できる。同様の時期に比定できるものに13がある。



第8図　出土遺物（磁器）

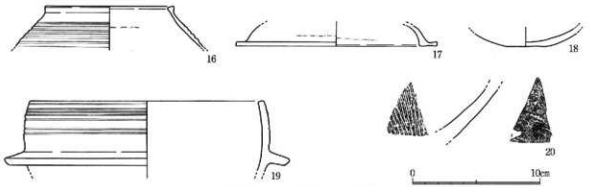
7は肥前系の筒形中碗で、唐花文とみられる文様と四方襷文が描かれている。18世紀後半に比定できる。肥前系の蓋付丸碗である10、肥前系の筒形中碗である11も同時期に位置付けることができる。

8は18世紀末～19世紀初頭に比定できる肥前系の広東形中碗である。また12は肥前系の小杯で、19世紀に比定できる。これらは出土遺物の中でも新しい一群で、19世紀代まで継続して耕作されていたことを示唆している。

16～20は陶器である。いずれも製作時期は不明である。

16は京焼系土瓶である。18も京焼系土瓶の底部破片である。京焼系の土瓶は、復元図化することができなかったため、写真図版のみを掲載したD・Eもあり、陶器の中では点数の多い器種である。

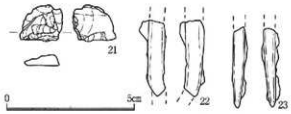
17は京焼系の行平蓋である。19は軟質陶器の羽釜である。口縁部に糸目文が残り、内外面に透明釉が掛けられている。生産地については不明である。20は堺焼擂鉢である。



第9図　出土遺物（陶器）

石製品は21の火打石1点のみである。磨耗が著しく、打撃痕跡は明確ではない。1辺1.1～1.5cm程度の小破片となった破損品である。材質はチャートである。

鉄製品は2点が出土した。ともに角釘である。遺存する大きさと状況から、別個体だと考えられる。22は現存長3cmほどの破片である。先端部に向かって折れ曲がっている。23も現存長3cmほどの先端部の破片である。これには現存部分での折れ曲りがなく、この点で22とは別個体だと考えられる。



第10図　出土遺物（石・鉄製品）

出土場所	種類	破片の大きさ（cm）と点数					平均値（cm）
		1～5	6～10	11～15	16～20	21～	
耕作土（1～3層）中	磁器	16	4	3			4
	陶器	8	7			1	6
	土器	7					1
	瓦器	1					1
	瓦	3		1	1		8
	石製品	1					1
機械掘削時（第1耕作土上面）	磁器	1					4
	陶器	1		1			8
	瓦	1				1	14
撹乱・盛土	磁器	3		1			5
	陶器		1				6
	瓦			2			14

平均値は小数点以下四捨五入

表1　出土遺物の大きさ

復元図化できないが、留意される遺物については写真図版に掲載した。Aは京焼系の土瓶である。外面には透明釉が掛分けされている。既述したように京焼系土瓶の出土点数は多く、外面にイッチン掛けしたD、鉄釉を掛分けしたEもある。

Bは磁器の小杯である。内外面に白磁釉が掛けられている。Cも磁器で、徳利の頸部破片である。ともに生産地は不明である。

ところで出土遺物の80％強が耕作土内から出土したものであるが、それらが調査地のごく周辺から耕作土内に直接廃棄・遺棄されたものか、それとも耕作土に二次的に混入したものかは、遺物だけでなく遺跡の評価に関わる点である。そこで以下に、出土遺物が混入品か否かについての検討を行う。その判断基準については、ここでは破片の大きさを根拠とする。破片が小さければ、廃棄から耕作土に含まれるまでの間に流転が繰り返され、破損が進んだ結果であるとみることができ、耕作土への混入品だという可能性が高まる。

耕作土中から出土したものは、鉄製品を除くと53点を数える。そのうち磁器についてみると、23点が出土していて70％の16点が5㎝以下である。23点全てを平均しても4㎝にすぎない。陶器は16点出土していて、羽釜（第9図19）1点が35㎝であるのを除くと、10㎝以下だけである。陶器の平均した大きさは6㎝にすぎず、やはり破片の小ささが窺われる。土器は7点が出土していて、いずれも5㎝以下の破片であり、平均値は1㎝と極めて小さい。この土器の顕著な破片化が焼物としての強度の低さに起因していることは明らかであるが、磁器や陶器もまた土器に近い程度に破片化が進んでいることからすると、いずれも同様の流転が繰り返されていたとみることができよう。

このことは、瓦の破片化の進み具合からも裏付けられる。瓦は5点出土していて3点が5㎝以下、1点が12㎝、1点が20㎝であり、硬質の瓦にあっても破片化が進んでいることは明らかである。大きさの平均値は8㎝であるにすぎない。

機械掘削時に耕作土上面で検出した遺物は磁器1点、陶器2点、瓦2点である。また攪乱・盛土から出土したものは磁器4点、陶器1点、瓦2点である。これらの遺物は、本来は耕作土に包含されていたのか、それとも明治30年代以降に別地点からもたらされた客土に含まれていたかは不明だが、破片の平均的な大きさをみると前者では磁器4㎝、陶器8㎝、瓦14㎝、後者は磁器5㎝、陶器6㎝、瓦14㎝であり、耕作土中のものよりも僅かに大きめではあるものの、その差は僅かである。よってそれらの大半は、耕作土から捲き上がったものと考えられる。

（財）大阪府文化財センターによる大西遺跡、若宮遺跡の発掘調査（大西遺跡06－1・若宮遺跡06－2）において、出土遺物の大きさを計測し、破片の平均的な大きさが磁器3.6㎝、陶器5.9㎝、土器5.3㎝、瓦19.5㎝であることを明らかにした。瓦で若干の違いはみられるが、その他では近似した大きさである。こうしたことからも、耕作土中の遺物は、耕作土中に直接廃棄・遺棄されたものではなく、客土や肥料に含まれていたものが耕作土中に二次的に混入したと考えられるのである。

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構・層	実測番号	種類	時期	器種	法量	器形の特徴
1	8	3	第1遺構面耕作土中	16	磁器	近世	小皿	(口) 9.6 (高) 1.3	口縁部折縁
2	8	3	第1遺構面耕作土中	6	磁器	近世	中碗	(口) 10.2 (高) 2.6	丸形
3	8	3	攪乱・盛土	23	磁器	近世	中碗	(口) 11.2 (高) 現3.4	丸形・くらわんか手
4	8	3	第1遺構面耕作土中	18	磁器	近世	中碗	(高) 現2.7	丸形
5	8	3	第1遺構面耕作土中	17	磁器	近世	中碗	(底) 4.4 (高) 現2.8	丸形
6	8	3	攪乱・盛土	21	磁器	近世	中碗	(口) 11.3 (高) 現2.8	丸形・くらわんか手
7	8	3	第1遺構面耕作土中	11	磁器	近世	中碗	(口) 11.3 (高) 現4.1	筒形
8	8	3	第1遺構面耕作土中	7	磁器	近世	中碗	(高) 現2.7	広東碗
9	8	3	第1遺構面耕作土中	9	磁器	近世	皿		
10	8	3	攪乱・盛土	22	磁器	近世	蓋付碗	(口) 7.4 (高) 現1.5	丸形
11	8	3	第1遺構面耕作土中	12	磁器	近世	中碗	(高) 現2.4	筒形
12	8	3	第1遺構面上面	2	磁器	近世	小杯	(高) 現1.7	丸形
13	8	3	攪乱・盛土	20	磁器	近世	中碗	(口) 12.5 (高) 現1.5	丸形・くらわんか手
14	8	3	第1遺構面耕作土中	4	磁器	近世	仏花瓶	(口) 5.4 (高) 現1.3	口縁部端直立
15	8	3	第1遺構面耕作土中	5	磁器	近世	小碗	(底) 1.9 (高) 現1.3	丸形
16	9	3	第1遺構面耕作土中	10	陶器	近世	土瓶	(口) 10.1 (高) 現3.2	口縁部肥厚
17	9	3	第1遺構面耕作土中	3	陶器	近世	行平蓋	(口) 15.8 (高) 現1.6	胴部丸形
18	9	3	第1遺構面上面	1	陶器	近世	土瓶	(底) 3.1 (高) 現1.4	ほぼ平底
19	9	3	第1遺構面耕作土中	19	軟質陶器	近世	羽釜	(口) 18.4 (高) 現5.5	鍔部下傾
20	9	3	第1遺構面耕作土中	8	陶器	近世	擂鉢	(高) 3.8	
21	10	3	第1遺構面耕作土中	13	石製品	近世	火打石	(長) 現1.4 (幅) 現1.7	
22	10	3	第1遺構面耕作土中	14	鉄製品	近世	釘	(長) 現3.0 (幅) 0.7	
23	10	3	第1遺構面耕作土中	15	鉄製品	近世	釘	(長) 現3.1 (幅) 0.4	
A		3	第1遺構面上面		陶器	近世	土瓶		
B		3	第1遺構面耕作土中		磁器	近世	小杯		
C		3	第1遺構面耕作土中		磁器	近世	徳利		
D		3	第1遺構面耕作土中		陶器	近世	土瓶		
E		3	攪乱・盛土		陶器	近世	土瓶		

整・成形の特徴	文様の特徴	焼成	備考	胎土
【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	唐草文	良好	中国製	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	一重網目文	良好	肥前系、17世紀後半	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	草花文（？）	良好	波佐見・平戸系、18世紀前半	黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉・蛇目釉焼	菊花文（コンニャク印判）	良好	肥前系、18世紀前半	黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	草花文	良好	肥前系、18世紀前半	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉		良好	波佐見・平戸系、18世紀中・後葉	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	唐花文（？）・四方襷文	良好	肥前系、18世紀後半	黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉	暦文（梵字文）	良好	肥前系、18世紀末～19世紀初頭	黒色粒子
【底部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉	五弁花文（コンニャク印判）	良好	肥前系	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・染付・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	草花文・四方襷文	良好	肥前系、18世紀後葉	黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	菊花文	良好	肥前系、18世紀後半	黒色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉		良好	肥前系、19世紀	黒色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉		良好	波佐見・平戸系、18世紀中・後葉	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・青磁釉（内）ロクロ・青磁釉		良好		黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉	菊花文（コンニャク印判）	良好	肥前系	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉 【胴部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・無釉	糸目文	良好	京焼系	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・無釉（内）ロクロ・無釉 【胴部】（外）ロクロ・鉄釉掛分け（内）ロクロ・灰釉掛分け		良好	京焼系	黒色粒子
【底部】（外）ロクロ・無釉（内）ロクロ・透明釉		良好	京焼系	黒色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・透明釉（内）ロクロ・透明釉	糸目文	良好		白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・ヘラケズリ（内）ロクロ・櫛引きスリ目		良好	堺焼	長石・石英・白色粒子
			チャート、剥片	
【胴部】（外）ロクロ・透明釉掛分け（内）ロクロ		良好	京焼系	黒色粒子・白色粒子
【口縁部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉 【胴部】（外）ロクロ・白磁釉（内）ロクロ・白磁釉		良好		黒色粒子
【頸部】（外）ロクロ・染付・透明釉（内）ロクロ・透明釉		良好		黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・イッチン掛・透明釉（内）ロクロ・透明釉掛分け		良好	京焼系	黒色粒子・白色粒子
【胴部】（外）ロクロ・鉄釉掛分け（内）ロクロ		良好	京焼系	黒色粒子・白色粒子

Ⅲ　まとめ－「佐野町場」周辺の水田開発－

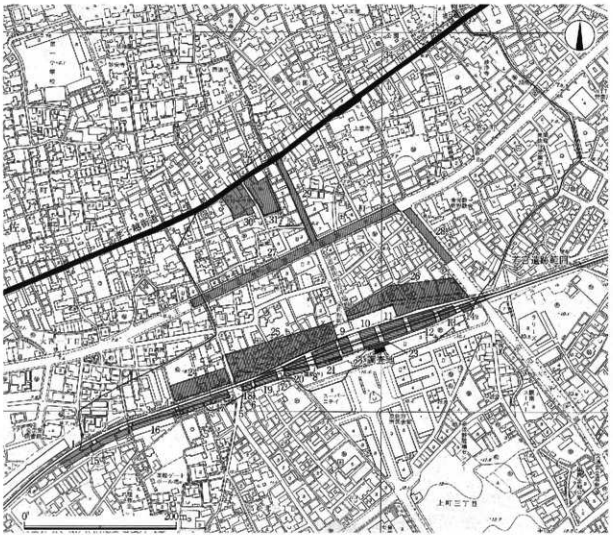
1　若宮遺跡における既往の調査

(1) 主要調査の概要

若宮遺跡では、これまで主として泉佐野市教育委員会によって発掘調査が実施されてきた。また南海本線連続立体化事業に伴う発掘調査が(財)大阪府文化財センターによって複数年にわたって行われた。

連続立体化事業に関連した調査面積は比較的広い。しかしその一方、「佐野町場」の実態解明が期待される主要地方道泉佐野・岩出線から孝子越街道までの範囲では、道路改良工事や埋設管敷設工事などに伴う発掘調査が多く、いずれの調査面積も狭小である。そのため町場やその前史に関する調査成果はまとまったものではなく、様相が断片的にしか捉えられないのが現状である。

第11図および表2に、既往の主要調査地点およびその成果概要を示した。



第11図　若宮遺跡の主要調査地点

No.	調査組織	調査年度	調査区	主要調査成果	報告書
1	(財) 大阪府文化財センター	2002	M	【近世】畦・側溝【中世】溝	『湊遺跡他Ⅱ』2004
2			L	【近世】水田段差	
3			K	【近世】畦・水田段差	
4			J	【近世】畦・水田段差【中世】土壙墓・溝・土坑	
5			I 5	溝・土坑・小穴（時期不詳）	
6			I 4	溝・土坑・小穴（時期不詳）	
7			I 3	【近世】側溝・土壙墓【中世】区画溝・溝・土壙墓	
8			I 2	【中世】溝・落込・土坑	
9			I 1	【近世】土壙墓【中世】溝・土坑	
10			II 5	【近世】畦・水田段差・井戸【中世】土坑・小穴	
11			H 4	【近世】畦・水路	
12			H 3	【中世】屋敷溝・道路状遺構・側溝・土壙墓	
13			II 2	【中世】屋敷溝・井戸・土坑（排水溜）	
14			H 1	【中世】屋敷溝	
15	(財) 大阪府文化財センター	2006	3区	【近世】畦	『大西遺跡、若宮遺跡』2007
16			2区	【近世】畦・水田段差	
17			1区	【近世】畦・水田段差	
18	(財) 大阪府文化財センター	2006	1区	溝・土坑（時期不詳）	『若宮遺跡』2007
19			2区	【近世】畦・側溝・井戸・土坑【中世】溝（道路側溝）	
20			3区	【近世】畦・井戸・埋桶・土器溜り【中世】土坑	
21			4区	【近世】畦・側溝・井戸・土坑	
22			6区	【近世】畦	
23			5区	溝・土坑（時期不詳）	
24	泉佐野市教育委員会	1996・97	A区	【近世】井戸1基・溝・土坑。平行するSD1202・1203間は2.5mで、道側溝と推定できる。SD1203延長脇には便甕（大谷焼）。近代の埋桶も存在【中世】溝（屋敷区画溝あり）・土壙墓2基（1基は積石墓）	『若宮・上町東遺跡』2001
25		1995・96・97	B区	【近世】井戸6基・溝【中世】土壙墓7基・井戸1基・溝（屋敷区画溝あり）・土坑（竈・水溜場の可能性あり）。池跡とみられる土坑が存在し庭の可能性ある	
26		1996・97・98	C区	【近世】井戸1基・溝（道路側溝あり）【中世】溝（屋敷区画溝あり）・土坑	
27	泉佐野市教育委員会	1989	89－1区 S・H区	【近世】7～20cmの整地層。井戸11基（枠組2基）・溝6条・土坑。井戸の大半は生活用と推定。井戸は分散的で1間を単位として間隔が開くので屋敷に伴うと推定	『若宮遺跡Ⅱ－89－1区の調査－』1990
28		1989	89－1区 T・S区	【近世】井戸5基（枠組1基）・埋甕（便甕）1基。井戸の大半は生活用と推定。井戸は分散的で1間を単位として間隔が開くので屋敷に伴うと推定できる【中世】溝2条・井戸1条・土坑。遺構は14世紀前半～15世紀前半に比定	
29	泉佐野市教育委員会	1989	89－2・4・6区	【近世】井戸14基（枠組3基）・溝（水路1）・土坑。遺構分布状況から道幅2～2.5mと推定され、屋敷地は1辺15～20mと予測できる。井戸は調査区西辺に沿って集中し屋敷に伴うと推定	『若宮遺跡 89－2区 89－4区 89－6区の調査』1990
30	泉佐野市教育委員会	2007		調査地は旧街道に面する。近世時に土地改変 【近世】井戸1基・埋甕5基・埋桶5基・土坑【中世】土壙墓3基、井戸2基・溝4条・土坑・柱穴群。溝3・5が屋敷割溝とすれば間口は15m。遺構は14世紀中葉～16世紀に比定。輪羽口・鉄滓出土	『若宮遺跡 07－3区の調査』2008
31	泉佐野市教育委員会	1987・96	87－1区	1～1.2mの整地上 【近世】井戸3基（枠組1基）・溝・土坑。井戸はいずれも生活用と推定【中世】掘立柱建物1棟	『若宮遺跡発掘調査報告書－87－1区の調査－』1987
			96－4区	現地表面下1.1mは近世の版築層 【近世】井戸2基（枠組1基）・木枠便所1基・土坑（地下窖）【中世】掘立柱建物2棟・溝・土坑、祭祀遺構。遺構は14世紀前半～16世紀に比定	『若宮遺跡－96－4区の調査－』1997
32	泉佐野市教育委員会	1993	93－4区	旧街道の石列（側溝）・整地層を検出	『第16号 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』1993
33	泉佐野市教育委員会	1990	90－6・7・8区	旧街道側溝（一部石組遺存）	『第3号 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』1991
34	泉佐野市教育委員会	1991	91－11区	旧街道の路盤部分を確認	『若宮遺跡－91－11区の調査－』1992
調査地点	大阪府教育委員会	2009		【近世】畦、側溝、溝、小穴	

表2　若宮遺跡の主要調査地点の概要

以下に町場外縁部（第１～26地点）、町場内周辺部（第27～29地点）、町場中心部（第30～34地点）に分けて、調査成果の概要を示しておく。

【第１～26地点（町場外縁部）の近世の様相】

南海本線に沿った第１～26地点では、近世と中世の遺構が検出されている。ただし近世と中世の状況はやや異なっていて、近世においては中世よりも耕作地化が進んでいる。

この26地点のうち、耕作に関連しない遺構としてはまず第７地点の土壙墓と第20地点の土器溜りがあがる。

第７地点の土壙墓は、肥前系染付磁器小杯、陶器、備前擂鉢が出土したＩ21土壙墓、唐津皿、土師質甕が出土したＩ22土壙墓、磁器碗、備前擂鉢、土師質甕・火入が出土したＩ23土壙墓の３基である。Ｉ21土壙墓の小杯は17世紀後半、Ｉ22土壙墓の土師質甕は17世紀前～中葉、Ｉ23土壙墓の備前擂鉢は17世紀中～後葉、土師質甕は17世紀中葉にそれぞれ時期比定でき、したがって耕作地となる直前の土壙墓群と理解することができる。

また第20地点の04土器溜りは近世前期から後期までの遺物が含まれ、ごみ穴が掘り返されたものか、意図的に不燃物が集められたものの可能性が指摘されている。近世前～中期に廃絶された井戸31の遺物を混入していると考えられていることから、近世後期にごみが畦の脇にまとめ置かれた可能性が高い。

さらに第24～26地点でも耕作と関わらない遺構が検出されている。第24地点では、屋敷地に伴って18世紀に掘削されたと推測されている井戸が存在する。井戸には土留め用の杭が打設されていた。その井戸を切り崩して道の側溝とみられるSD1202・1203が平行して走り、SD1202延長の北側に埋桶３基、SD1203延長の南側に便槽とみられる大谷焼甕の埋甕が検出されている。このことから18世紀には屋敷地は存在し、近代に入って一部は耕作地化したと考えられる。なおこの地点における近世前葉の様相は不明である。

第25地点では、中世後葉のものを含む井戸６基と溝が検出されている。井戸はSE2203が16～17世紀中頃、SE2307が17世紀後半、SE2327が18世紀後半に廃棄されたとみられていて、残りの井戸３基はSE2203に近い年代と推定することができる。いずれも素掘り井戸で、調査地の東にまとまって位置している。このことから、中世から近世前期にかけて井戸が掘削され、多くは17世紀代のうちに、遅くとも18世紀中頃までには廃絶され、一帯は水田になったとみられる。また18世紀後半以降の遺物が減少傾向にあるといわれていて、上述した状況を反映する現象であると捉えることができる。

一方、この地点での溝は調査地の西に集中する。溝底から現代物が出土したという「コ」状に廻るSD2302の東６ｍに現在の里道が存在していて、SD2302は里道によって規制されたとみられる。またSD2302に先行する南北方向のSD2301は、時期不詳のSD2001と３ｍの幅をもって平行する。里道とは20ｍの距離を測る。SD2302が近世から継続した屋敷地の区画だとすれば、SD2001とSD2301を側溝とした道が廃絶、あるいは現里道に移ったのち、現里道の西に屋敷が

建てられたと考えられる。また時期不詳のSD2308の東は現里道の延長脇に当たり、この溝も屋敷地区画の可能性があるが、くらわんか手の波佐見・平戸系磁器碗などが出土していて、18世紀中～後葉に比定することができる。このように近世の屋敷地は散在していて、さらに第24地点のSE1201付近に屋敷地があったという推定を考慮するとしても、これらの調査地点周辺は町場内とは異なった屋敷地の在り方、すなわち散村的状況であったと推測する。

第26地点では現在の里道の延長に当たる部分で、重複するSD3201・3202が検出されていて、道の側溝と考えられる。SD3202からは18世紀中葉を中心とする遺物が出土していて、波佐見・平戸系磁器が出土したとされるSD3201も同時期とみられる。しかし、中世後期に遡るとされるSD3101が2～3mの距離をもって併走していることから、道は中世後期に存在していたと推測できる。さらに南に隣接する第12地点でもH5道路状遺構の側溝が検出されている。SD3201・3202より西では明確な遺構はなく、調査地の西端近くに近世の耕作痕が集中していることから、当該期における第26地点の西半分は耕作地であった。また耕作痕は調査地の北辺中央付近でもみられ、調査地東端で検出された素掘り井戸SE3201は18世紀には廃絶している。第25地点の東部分と同様、各野井戸が廃絶される18世紀代に、水田化したとみられる。

ところで明治41年（1908）に作成された佐野町場絵図によると、町場の南端は、東部分を除いて、旧若宮神社付近となっている。旧若宮神社は南海本線の北約70mに当たり、最も近距離にある第25地点でも40mほど離れている。したがって第1～26地点の様相は、町場を離れた状況を反映しているのである。つまり近世にあっては、素掘り井戸（野井戸）を伴う畠地、およびそれを崩して形成された水田といった耕作地が基本的に広がり、その中に散在して屋敷地が設けられていたと考えることができる。

【第1～26地点（町場外縁部）の中世の様相】

第1～26地点における中世の様相に関しては、多くの地点で屋敷の区画溝や土壙墓が見つかっていて、明らかに集落域に当たっている。なおそうした状況は、南海泉佐野駅の西よりも東で顕著である。

屋敷区画溝が検出されたのは第12・13・14地点および第24・25・26地点であり、若宮遺跡内でも北方および東方にいくにつれ集落が稠密する傾向がみられる。また第7地点でも区画のためとみられる溝が検出されていて、屋敷や集落に関連する可能性が高い。

第12地点のH2溝は14世紀後半～15世紀前半に廃絶したとみられ、その後に僅かに重複して既述した中世後期以降のH5道路状遺構と側溝が形成されている。またH5道路状遺構の西には土壙墓と推定される落込みが群在している。ただ出土遺物がなく、時期の比定はできない。

第13地点では、第12地点で検出されたH2溝のほか、H1溝が検出された。この溝も、14世紀後半～15世紀前半に廃絶されたとみられる。さらに、丸瓦を伏せて樋としたH9溝と、その一端に設けられた排水溜と考えられる礫を充填した土坑（H8土坑）が存在し、屋敷地内の様相を僅かながらも窺うことができる。第14地点でも、H1溝の延長が検出されている。

町場外縁部の中でも僅かに北寄りに位置する第24～26地点のうち、第25地点は最も遺構分布の密度が高い。まず現里道の東に近接してSD2105が存在し、折れ曲がってSD2108に繋がり区画溝をなすとみられている。この区画内には井戸（SE2103：16世紀中葉、SE2112：16世紀後葉、SE2151：16世紀末～17世紀初頭）、土壙墓（SK2115・2117・2118・2119・2120：16世紀後半）、池跡とみられる落込み（SP2132・2133：（16世紀末～）17世紀）、竈あるいは地鎮遺構の可能性がある土坑（SE2109：16世紀中葉）などが存在している。また区画外ではあるが、接するように井戸の水溜場（SK2128・2129：16世紀中葉）が認められる。このほか、区画内に位置するとみられる時期比定の可能な遺構としては、SX2113（16世紀中葉）や16世紀代といわれているSX2134もある。したがって屋敷があったとすれば15世紀後半～16世紀前葉に設けられ、16世紀末までに廃絶したと考えられる。

区画溝の南にSD2137が東西方向に延びている。土地の区画溝とされているが、ほぼ同位置に現道が存在していることから、道の側溝である可能性が高い。この溝と平行するSD2136も道の側溝であるとの指摘があり、15世紀の瓦質土器の細片が出土している。SD2137からも15世紀の遺物が出土している。したがって道の設定は少なくとも15世紀にはなされていたといえる。

ただ区画外においてもSK2139が15世紀後半～16世紀前葉、SD2101・2153・2150およびSK2155・2159が16世紀中葉、SK2130が16世紀後葉、土壙墓とされるSK2101・2135が16世紀にそれぞれ比定することができ、区画内に限らず調査地点一帯では15世紀後半になって屋敷地の形成が進められた。

第24地点の屋敷区画溝と推定されるのはSD1101で、土壙墓の可能性のあるSK1102がその内に存在する。ともに瓦器椀が出土していて、13世紀末頃に位置付けることができる。

この調査地点では、さらに別の土壙墓１基も存在する。積石墓であるSK1102で、先のSK1101とは約50ｍの距離がある。この土壙墓からも瓦器椀の細片が出土している。ところでこの土壙墓も屋敷墓の可能性が指摘されていて、そうだとすればSD1101で画された屋敷とは異なる、さらに別の１軒が存在していた公算が高い。

第26地点では「十」字状に分かれ、南でSD3106に繋がるとみられるSD3105が屋敷地に付随する区画溝との指摘がなされているが、出土遺物から16世紀中葉に時期比定できる。またSD3106のさらに南のSD3108も、一連の区画溝の可能性がある。

この調査地点において、時期比定ができる他の遺構にはSK3101（16世紀前半）、SX3101（16世紀中葉）、SD3109（16世紀前葉）もある。こうした状況は先の第25地点と近い。

第７地点では道の側溝とみられるＩ２溝と、それに平行するＩ３・４溝が検出され、区画の機能を果たしていたとみられている。なおＩ１溝は、隣接する第20地点では検出されていないことから、区画溝ではないと考えられる。Ｉ３溝からは土師器皿がまとまって出土していて、15世紀後半に比定できる。

この調査地点では２基の土壙墓が検出されている。１基はＩ20土壙墓で、底面に礫が敷かれ

ていた。年代比定ができる遺物の出土はなかった。もう1基はⅠ24土壙墓で、15世紀後半～16世紀前葉に位置付けることができる。

なお第19地点の02溝は第7地点のⅠ2溝、第25地点のSD2137と同一と考えられていて、南海本線を横断するように北東－南西に延びる現道が中世まで遡る可能性を示している。

土壙墓が検出された調査地点は、既述した第7・12・24・25地点のほか、第4地点でも1基（J8土壙墓）が見つかっている。土師器皿5点と短刀1点が出土し、14世紀に比定されている。周囲には時期不詳の土坑や溝が存在するが、隣接する第17地点の状況を合わせても屋敷地の存在は認められないので、耕作地となる前の単独墓である。

【第1～26地点（町場外縁部）の時系的変遷】

南海本線に沿った第1～26地点の中・近世における様相についてまとめておく。

第24地点で検出された屋敷溝や土壙墓からは瓦器椀が出土していて13世紀末頃に比定できることから、この周辺では最も時期が遡る。その後、断絶期を挟んで14世紀後葉～15世紀前葉に第12・13地点の屋敷地や第4地点の土壙墓が形成される。そして再度の断絶期を経て、15世紀後半から16世紀前葉にかけて第25・26地点で屋敷地が設定された。また15世紀後葉から16世紀前葉にかけて第7地点で、16世紀後半に第25地点でそれぞれ土壙墓が設けられる。

こうした13世紀後半に始まる屋敷地の形成は、時・空間ともに散在的であり、継続的な集落構成をなしてはいない。そして直接の証拠はないが、屋敷地の周囲には恐らく畠地が広がっていたと推定する。

そしていずれの屋敷地も16世紀末には廃絶し、畠地はさらに拡大した。そしてその後も畠地域に屋敷地が極めて少ないながらも存在したとしても、16世紀以前よりはさらに散在的であった。17世紀末まではそうした畠地の広がる状況が継続するが、17世紀末～18世紀中葉になると屋敷地やそれまで畠作に用いた野井戸の多くは放棄され、水田が形成される。

このように、近世町場の形成と入れ替わるように、その外縁部では耕作地化が進んだという状況を確認することができた。

【第27～29地点（町場内周辺部）の近世の様相】

南海本線沿いから孝子越街道までの間の、「佐野町場」内の様相について概観する。とはいえ、現在の町内には家屋が建てこんでいて、これまで規模の大きな開発はほとんどなされなかった。発掘調査は主として道路整備に伴ったものであり、そのため調査成果も町場の断片的な状況が把握できたにすぎなかった。この範囲に該当する調査地点は、第27～29地点の3地点である。近世の遺構は3地点いずれでも検出された。

第27地点では、井戸11基および溝、土坑が検出された。屋敷地の存在を示す痕跡は見つかっていないが、井戸は大半が生活用だと推定されていて、また分散的ながらほぼ1間を単位とした間隔で広がっていることからも、本来は屋敷地に伴ったものと理解できる。屋敷地の痕跡が検出されないのは、多くの部分で地山面まで削平が及んでいることに起因すると考えられる。

第28地点では、井戸５基、水甕と推定されている埋甕１基が検出されていて、ここでも井戸は生活用とみられている。出土遺物の大半は近世以降のもので、しかも18世紀以降のものが多いという。近世を通じて屋敷地が設けられていたことを暗示している。

第29地点では、井戸14基および溝、土坑が検出された。溝のうち１条は水路とみられる。また遺構の分布状況から、道の幅は2.0～2.5ｍとみられている。さらに同様の視点から、屋敷地は１辺15～20ｍと推定することができる。

【第27～29地点（町場内周辺部）の中世の様相】

第27地点では中世に比定できる遺構は検出されていない。削平が地山面まで及んでいるためもあるが、しかし11基検出された井戸はすべて近世に比定されているので、本来中世の遺構がなかった、あるいは極めて少なかったと考えられる。少なくとも、井戸のように掘削深度の深いものはなかった。

第28地点では、井戸１基、溝２条、溝状落込み１基などが検出された。多くの遺構からは瓦器の破片が出土しているものの、各遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半といわれている。瓦器が混入したものであるとすれば、14世紀後半～15世紀前半が調査地点付近における本格的な開発の時期であるとみることができる。

第29地点では、第27地点と同様、中世に比定できる遺構は検出されていない。この地点においても、本来的に中世の遺構がなかったか、あるいは極めて少なかったと考えられる。

【第27～29地点（町場内周辺部）の時系的変遷】

南海本線沿いから孝子越街道までの間の、「佐野町場」内における中・近世の様相についてまとめておく。

第28地点では、比較的多くの瓦器が出土していることから、検出遺構よりも遡る13世紀末頃からその一帯の開発が始まったと考えられる。そして若干の断絶期を挟んで14世紀後葉～15世紀前葉に本格的な開発が進み、屋敷地が形成された。この状況は第24地点および第12・13地点などの南海本線北側の状況と近似している。一方、第27・29地点では、中世の遺構は検出されていないので、14世紀後葉～15世紀前葉の画期は及んでいなかった可能性が高い。

ところが15世紀後半以降、この一帯は再び断絶期を迎える。そして、面的な広がりをもって改めて生活域が形成されるのは17世紀後半～18世紀になってからであり、第27・29地点では整地層が検出されている。つまり、15世紀後半以降は主として畠地であったと推定できる。

このように中世集落がいったん途絶え、耕作地になるという状況は町場外縁部に当たる第１～26地点と同じである。しかしその後、町場の外縁部では畠地および水田が継続して形成されたのに対して、この町場内周辺部に当たる第27～29地点では、孝子越街道沿いよりも遅れるとはいえ、町場形成の波が確実に及んでいた。慶長20年（1615）に陸・浦併せて350戸であった佐野村が、正徳３年（1713）には1666戸に増え、人口も8697人になったという。こうした人口の増加が町場の外周拡大をもたらしたといえる。

【第30～34地点（町場中心部）の近世の様相】

孝子越街道部分および街道沿いの「佐野町場」中心部の様相について概観する。とはいえ、5調査地点中3地点は道路整備に伴う調査であるため、当該期の街道状況が検出されただけで、町場の様相を捉えることができたのは街道に面した第30・31地点の2地点のみであった。

第30地点では、井戸、埋甕、埋桶などが検出された。埋甕のうち2基には甕を固定するための粘土が貼られていて、また年代比定ができるものは17世紀前半に位置付けられている。一方、埋桶はいずれも近世中期以降のものとみられているので、埋甕と入れ替わって設けられたと考えることができる。そしてそれらは、この土地所有者の職業と関わっている可能性が高い。

第31地点では、井戸、木枠便所、地下窖が検出された。また街道に平行する溝（溝4・5）や直交する溝（溝6）も検出されている。時期を確定することはできないが、第30地点の状況からすると、近世に比定するのが適当とみられる。なお木枠便所については、「共同便所」の可能性が指摘されている。とすれば便所の東に通りがあり、便所の南に延びる溝がその側溝となる。

ただこの隣接した第30・31地点にあっては、屋敷地の区割りを明確にすることはできず、調査地点全体が屋敷を含む生活域であるというに留まる。

第32～34地点は現道部分における調査である。第32・33地点では近世の街道の側溝に設けられた石列が検出されていて、近世の街道は現道よりも幅が狭かったという可能性が指摘されている。そのことは、孝子越街道が町場内で上往還と下往還に分かれる一因と推測することができる。第34地点では、街道の路盤層が検出された。

【第30～34地点（町場中心部）の中世の様相】

近世の町場内の様相が比較的不明瞭であったのに対し、中世の屋敷地の様相はより具体的に捉えることができる。ここでは、土壙墓、井戸、溝、土坑、柱穴が見つかった第30地点と、掘立柱建物、溝、土坑、祭祀遺構が見つかった第31地点を併せて概観する。

まず第30地点では、街道に直交する溝2・3・4・5が存在する。そのうち溝5は、14世紀中葉～末に比定できる土壙墓1を削して設けられていることから15世紀代に比定できるとすれば、第31地点の溝4と同時期となる。第30地点の溝3の時期は明らかにならないが、その東に近接する溝2は土壙墓群と同時期の14世紀中葉～末に埋まったとされているので、溝5よりも一段階古い遺構である。したがって溝5とともに屋敷地の区画をなすのは溝3である可能性が高く、その東に第31地点の溝4がある。溝5と溝3の間は15m、溝3と溝4は26mであるが、調査地点間に未調査部分が生じているので、その間にさらに区画溝があったことは充分に予測でき、したがって屋敷地間口は13～15mほどであったとみられる。16世紀代に比定されている第31地点の溝1と溝5の間はおよそ12mであるので、ほぼ同様の屋敷地規模が中世末以降にも踏襲され、それを分割することで屋敷地数を増やしたと考えられる。

屋敷地の奥行については、時期不詳ではあるが第31地点の溝6の北に平行して位置する溝までであると考える。そしてこの溝と溝6の間が1.8mであるので、両溝は路地の側溝であったと

みられる。つまり、第30・31地点付近では15世紀には短冊型の屋敷地割りが成立していて、それは14世紀中葉まで遡る可能性が高いのである。

なお第30地点で検出された掘立柱建物のうち、建物2は屋敷地の方向性に準拠している。これに対して建物1は正方位に軸をもっていることから、第30地点の溝2以前の建物とみられる。溝2が14世紀中葉～末であることを勘案すると、14世紀中葉に地割りの画期が求められる。

14世紀中葉に形成され始めた屋敷地割りが基本的に中・近世を通じて踏襲され、上述したように、それを細分することで屋敷地数を増やしたのである。ただ、街道に沿った範囲では短冊型の屋敷地割りが採られていたが、一筋裏に入ると不整形な地割りが多くなる。これは自然地形に起因する部分もあるが、さらに町場内に点在する寺院との関連もあるのではないかと推測する。

第32～34地点では、中世に遡る遺構は検出されていない。

【第30～34地点（町場中心部）の時系的変遷】

町場中心部に当たる第30～34地点では、現在の孝子越街道よりも幅の狭かった旧街道に面して14世紀中葉以降に屋敷地が設けられていった。街道に面する範囲では短冊型の屋敷地割りが基本ではなかったかと考えられる。それに対して14世紀中葉以前では、正方位に沿った建物が予測できるので、街道は14世紀中葉に整備されたことになる。

さらに第30・31地点では瓦器が出土していることから、集落自体は13世紀後半にまで遡る可能性が高い。ただ、町場外縁部の第1～26地点でも瓦器の存在が認められることから、14世紀中葉までは遺跡内において散在的に生活域が広がっていて、街道整備に伴って集約化されるようになったといえる。この14世紀中葉～末の屋敷地割りが、近世以降も基本的に踏襲された。

【若宮遺跡における中・近世の集落構造】

若宮遺跡においては、中・近世を通じて街道沿いの範囲が集落構造の中核であり、そこから南に離れるにつれ、耕作地化が促進されていた。無論、集落中核の集約化から外れたこのような縁辺部の状況は、「佐野町場」特有のことではない。

こうした様相を時系列で示すと表3となる。

時期	町場中心部	町場内周辺部	町場外縁部
13世紀後半	散村的集落の形成	散村的集落の形成	散村的集落の形成
14世紀前半	散村的集落の継続	集落の断絶	集落の断絶
14世紀後半～15世紀前葉	集村的集落の形成	屋敷地の形成（散村的）	屋敷地の形成（散村的）一部畠地の形成
15世紀後半	集村的集落の継続	畠地の形成	畠地の拡大
16世紀後半～17世紀前半	近世町場の形成	畠地の継続	畠地の継続
17世紀後半～18世紀	町場の拡充	屋敷地の形成（町場の拡張）	水田の形成

表3　若宮遺跡の集落構造の変遷

（2）調査地周辺の近世遺構

調査地周辺では、泉佐野市教育委員会および（財）大阪府文化財センターによって複数の地点で発掘調査が実施されている。後者の調査については第11図および表2の第5～12地点、第18～22地点が該当する。これらは南海本線連続立体化事業に伴う調査である。また市教育委員会の調査は、泉佐野駅前の整備に伴うものであり、小規模な調査が多い。

調査地周辺において検出された遺構の大半は、近世の耕作に関連するものであった。これは、第2章で示したように本調査地においても同様であった。主な遺構としては、畦、畦の側溝、井戸・埋桶、水田の段差である。

井戸はセンターの02－H5区（第10地点）、06－2区（第19地点）、06－3区（第20地点）、06－4区（第21地点）の4地点で検出されている。枠組みを伴うものはなく、いずれも素掘りの野井戸とみられる。このうち06－3区検出の井戸は近世前～中葉に埋没したとみられていて、また06－4区では畦の築造によって18世紀に埋められた井戸が見つかっている。

他の井戸は埋没時期が明らかでないが、（財）大阪府文化財センターが2006年度に実施した大西遺跡の発掘調査でも18世紀代に2基の井戸が埋められていた。このことからも、先に示したように、調査地周辺ではその頃までに多くの野井戸が埋められ、18世紀以降に一帯が水田になったといえる。

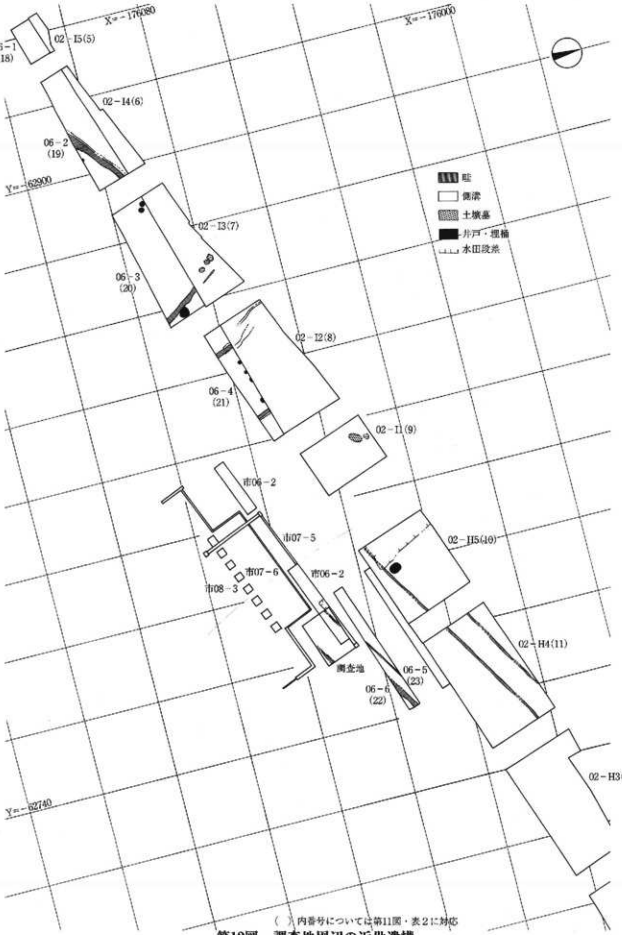
水田の存在を示す遺構としては、畦と側溝、水田の段差があるが、その具体的な年代を明らかにすることはできない。ただ多くの調査地点では旧耕作土とその直下の床土が遺存していて、そこに含まれる遺物は近世中期以降のものが主体である。状況的に、18世紀を画期として畠地から水田に移行したことを否定する根拠は見当たらない。

ところで耕作に関連しない遺構として、02－I3区（第7地点）と02－I1区（第9地点）で検出された土壙墓群がある。前者では3基、後者では2基が存在する。

このうち02－I1区（第9地点）検出の1基は17世紀後半に廃絶されたとみられることから、水田になる直前の土壙墓といえる。さらに02－I3区（第7地点）の3基の土壙墓も17世紀代に廃絶していて、しかも隣接する06－3区で検出された畦が土壙墓検出面では認められていないことから、畦設置以前の共同墓地であったと捉えることができる。したがってこれらは水田化される前の墓である。

泉佐野市教育委員会による調査では、本調査地と一部重複する市教委06－2区において畦と水田段差が検出されている。このうち畦は、センター06－6区（第22地点）の畦とつながるものである。この市教委06－2区、センター06－6区および本調査地の畦の状況をみると、調査地周辺の中でも特に畦が近接していて、水田の南北幅が狭められている。これは、灌漑水路が北進すると町場を通過するので、東西方向へ排水するための措置だと考える。

このように、本調査地における調査成果は、近世の若宮遺跡の周縁部、すなわち「佐野町場」の外縁部の状況を端的に示すものであった。



（ ）内番号については第11図・表2に対応

第12図　調査地周辺の近世遺構

（3）調査地周辺の市教委調査の概要

本調査地に近在して、泉佐野市教育委員会による発掘調査が実施されている。そのうち4調査地点の成果を取上げ、表4にまとめた。遺構が検出されたのは市教委06－2区のみであり、既述したようにこの調査地点で検出された畦はセンター06－6区の畦とつながる。

このように市教委の発掘調査では検出遺構は極めて少ない。一方、4調査地点における基本層序は、盛土の下に旧耕作土・床土があり、さらにその下に整地土が存在する07－5・6区と整地土の認められない06－2・08－3区に分かれる。

本調査地でも盛土下の旧耕作土・床土のさらに下にも部分的に土層が観察された。したがって06－2・08－3区では、下層土が削平されている可能性が考えられる。

ところで本調査地における旧耕作土・床土の下層土については、旧耕作土以前の耕作土であると判断した。これは、2006年度に発掘調査を実施した若宮遺跡・大西遺跡の調査成果とも一致している。このことから、市教委07－5・6区において整地土とされたものは、下部の耕作土である可能性が高い。なおこの下部の耕作土もまた、本調査地の結果などを踏まえると、近世から近代初頭にかけて形成されたと考えられる。

ところでベース層上面の標高は、本調査地ではおよそT.P.9.4mであった。これに対して、市教委07－5区ではT.P.9.2～8.9m、市教委07－6区ではT.P.9.1mを測り、北から西方向にかけて地形が僅かに下降する状況を窺うことができる。さらに、市教委08－3区では下部の耕作土が削平されているとみられるが、それは調査地点が僅かに地形の高い南東側に位置していて、旧耕作土・床土の形成にあたって削平が基盤層上面まで及んだためと考えられる。

このように調査地周辺においては、僅かな地形の高低差に対応しつつそれを取り込み、さらに若干の改変を加えつつ、水田面が形成されるという状況を如実に看取できる。

調査地点	発掘調査原因	調査概要
市06－2	駅前広場整備事業	14×3mと26×3mほどのトレンチを設定した。0.5～0.8mの盛土を除去すると、灰色の旧耕作土および床土が検出され、その直下に砂礫混じりの赤褐色粘土層であるベース層となる。その深度は現地表面から0.7～1.1mである。ベース面上で溝、土坑、畦が検出された。また旧耕作土内からは近世の陶磁器や瓦が出土した。
市07－5	汚水管敷設工事	鉄道敷設に伴う盛土層を除去すると部分的に灰色粘土の旧耕作土と灰褐色砂混じりシルトの床土および整地土を検出。これらの直下がベース層で、その上面は調査地点の西においてはT.P.9.2m、東ではT.P.8.9mを測る。ベース層は赤褐色の粘土と砂礫からなる段丘面の堆積層である。検出遺構はなかった。
市07－6	水道管敷設工事	鉄道敷設に伴う盛土層を除去すると部分的に灰色粘土の旧耕作土と灰褐色砂混じりシルトの床土および整地土を検出。これらの直下がベース層で、その上面はおよそT.P.9.1mを測る。ベース層は赤褐色の粘土と砂礫からなる段丘面の堆積層である。検出遺構はなかった。
市08－3	駅前広場整備事業	2×2mのトレンチを8箇所設けた。西から第2・3番目のトレンチを除くと、盛土下に灰色粘土の旧耕作土、灰褐色シルトの床土があり、その直下がベース層であった。ベース層上面で耕作に関連する落込みの認められたトレンチもあった。旧耕作土・床土からは遺物の出土はなかった。

＊調査概要に関しては、泉佐野市教育委員会から提出された「埋蔵文化財発掘調査結果について」（報告）に基づいて記述した。

表4　調査地周辺の市教委調査の概要

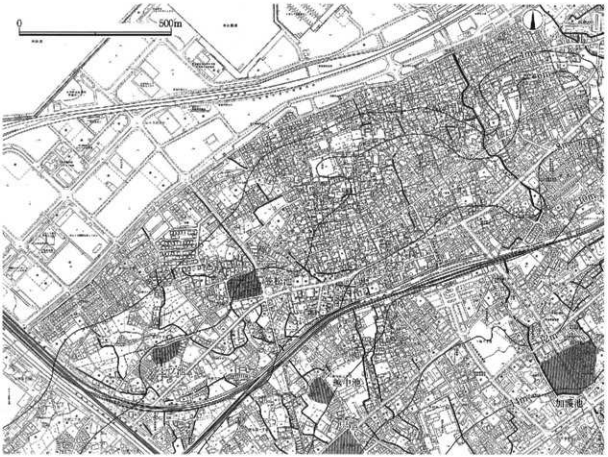
2 「佐野町場」周辺の微地形と水路

(1) 微地形からみた水路

「佐野町場」周辺の水田開発を可能とする水利状況を捉える前提として、その一帯の微地形を把握しておく。ただし水田開発が進められた18世紀代の地形を復元することはできないので、まずは現標高を基に現況図に等高線を描くことで、大まかではあるが町場周辺の微地形を理解する手掛かりとしたい。さらに現況の水路を重ねた。調査地周辺の現況水路は、町場が拡大する近世中期以降には大きな改変がなかったとみられるからである。

「佐野町場」は南半が中位段丘面、海側の北半が沖積平野に形成されて、全体としては海方向、すなわち北西方向に緩やかに下降する。したがって等高線は、基本的には南東から北西に向かって平行して延びる。円田川周辺のように自然地形のために等高線の乱れが生じている部分もあるが、自然地形の影響とはみられない不自然な部分が認められる。しかもその部分における現況水路は、地形の改変と関連しているとみられる。

等高線に不整が認められる部分は、大きくは3箇所である。第1は円田川以西約600mにかけての南海本線北側の範囲で、標高6mと8mの等高線が海側へ張り出している。この範囲は「佐野町場」の大半を占めている。



第13図 「佐野町場」周辺の微地形

第２は市立第一小学校付近で、標高60ｍの等高線が舌状に西方に大きく張り出している。町場内における等高線の乱れのなかでも最も顕著な部分である。

第３は町場の西外方にあたる笠松池付近と三ッ池の北付近である。ともに海側に等高線が張り出している。なお両溜池ともに現在は埋立てられている。

第１の範囲の不整合な等高線については、町場範囲の大部分と一致していることから、町場の形成にあたり、盛土整地がなされたためと考えられる。この範囲には、西法寺や明厳寺の東を通る水路がある。町場の中心域を縦断するこの水路は、おそらく町場の形成初期には整備されていたとみられる。

第２の地点は、かつて食野家の屋敷地が存在していた場所である。したがって屋敷の建築にあたって、大掛かりな盛土造成がなされた可能性が高い。

第３の範囲における等高線の張り出しに関しては、幾つかの可能性が考えられる。第１は、溜池の埋立てに伴って付近一帯に盛土がなされたとの見方。第２は、溜池の築造に伴って付近一帯が盛土造成されたとの見方。第３は、本来的に海寄りにやや舌状に張り出していた地形上に溜池を設けたとの見方、である。ところでこの付近を通る孝子越街道は、等高線の張り出しに相応して幾分屈曲している。このことから、自然地形と捉える第３の可能性が高いといえる。

この笠松池や三ッ池付近には網目状に多くの水路が走行している。それらは北から、新之池・十蔵池→中池からの水路、新之池・十蔵池→中池→越中池→笠松池・三ッ池からの水路、新之池・十蔵池→中池からの水路におおまかに分かれる。笠松池や三ッ池は、末端に位置する溜池であることから、それらの構築以前において旧河道に当たる谷筋に中池から引かれた水路が既に存在していて、それを取り込みつつ新たな溜池と水路を設けるために、水路の通っていなかった微高地が溜池構築場所として選地されたと推測される。

ところで正保２年（1645）～元禄２年（1689）の間に中池が構築されている。一方、下流にある笠松池や三ッ池は中池の構築後に設けられたのであろうが、笠松池は元禄２年に中池と共に存在が認められることから、中池とさほど時間の隔たらないうちに構築されたと考えられる。三ッ池もまた、笠松池とほぼ同時期に構築されたとみられる。

したがって、「佐野町場」の南西から西にかけての範囲で水田化が進められたのは、まず17世紀中葉であり、それを取り込みつつより集約的な開発が17世紀後半以降になされ、逐次水路を整備しつつ水田域が拡張されたと考えられる。

なお、正保２年以前に構築された十蔵池からの水路は、「佐野村用水絵図」によれば上三ヶ尻池・三ヶ尻池、末広池、中池、越中池に落し込まれている。このうち上三ヶ尻池・三ヶ尻池は正保２年以前に構築されていて、ここからの水路によって羽倉崎方面に給水されている。一方、上三ヶ尻池・三ヶ尻池から末広池につながる水路も延びている。末広池は、発掘調査によって近世末以降の構築であるとみられている。したがって「佐野町場」の南西から西にかけての水田化は、町場周辺のなかでも遅れたと考えられる。

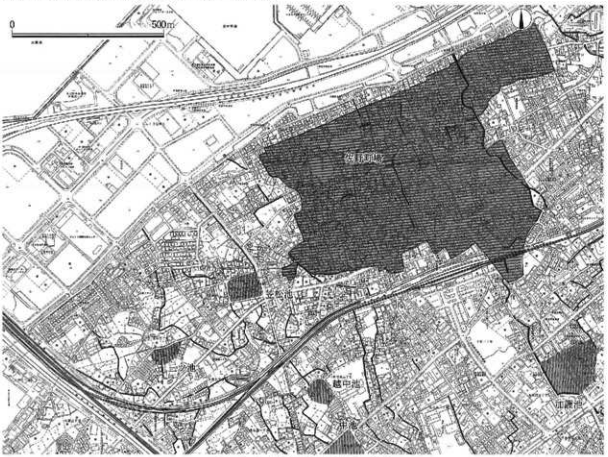
(2)「佐野町場」の水路

前節でみたように、「佐野町場」の中心域を縦断する現在の幹線的な水路は、西法寺や明厳寺の東を通る。明厳寺の北西200 mにも、海方向へ延びる水路が部分的に認められるが、これは西法寺の西脇を通る生活排水路の延長であるとみられる。なおこの町場を縦断する水路の上流部は、主要地方道泉佐野岩出線付近以南で暗渠となっている。

ところで16世紀後半～17世紀前半に近世町場が成立したとすれば、この水路もほぼその頃には既に設けられていたと考えられる。その本来の源を明らかにはできないが、西法寺の南東延長にあって南北に延びる粉河街道が白水池の西脇を通っていることから、粉河街道から西法寺が面する道に沿って水路が形成された可能性は高く、とすればこの水路は中世中葉まで遡る。

さらに重要なのは、少なくとも町場に入ってからは水路は水田耕作と関わらないという点である。このことは、「佐野村用水絵図」や「佐野村・濱村立会絵図」にその存在が描かれていないことにも示されている。

前者の絵図には妙光寺の東を通る水路が存在し、いったん断絶したのち高松村を経て旧若宮神社の東まで延びている状況が描かれている。これがさらに西法寺の脇まで延びるとすれば、用水路としての機能ではなく、妙光寺から西法寺をつなぐ門前道が現在の府道泉佐野停車場線にほぼ一致して存在し、それに沿って掘削された側溝であり、町場への給水と生活排水の役割を果たすための水路であると推定することができる。



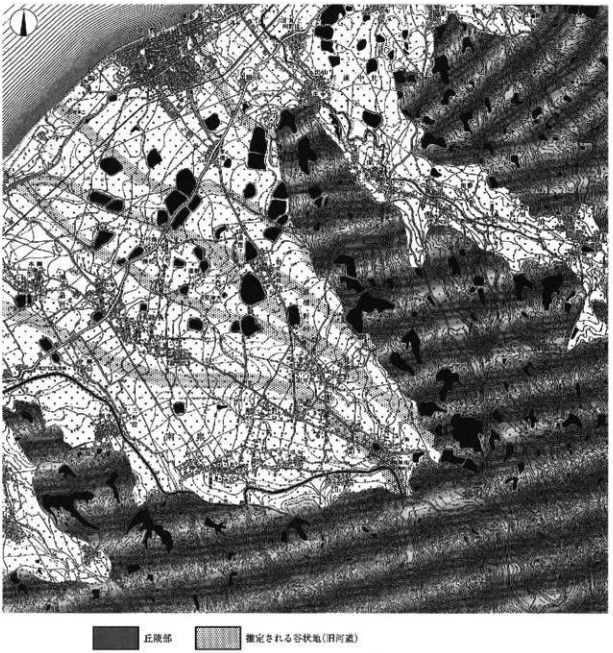
第14図 「佐野町場」と水路

3 「佐野町場」周辺の溜池

(1) 溜池と構築地形

「佐野町場」周辺の溜池として、土丸から東は大久保、貝田、西は兎田、安松、北は上瓦屋、高松、末広などを囲む一帯のものを対象とし、59箇所を取上げた。これらの溜池は、現在の地図と絵図に描かれている溜池の名称と位置を対応させることで同定を行った。

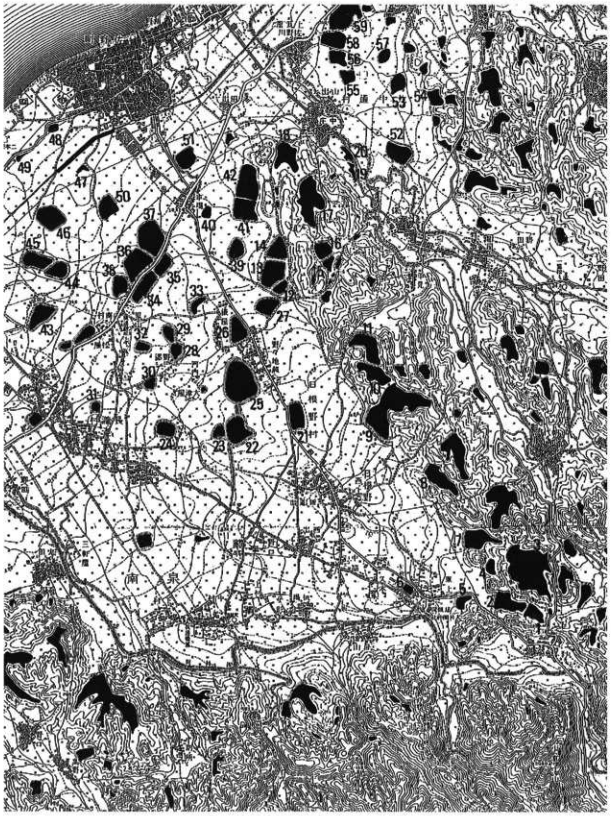
この59箇所の溜池は、立地の点から2分できる。ひとつは丘陵部に構築されたもの、いまひとつは中位段丘面や沖積地に設けられたものである。具体的には、檀波羅丘陵上、樫井川以東の段丘・沖積地、佐野川以東段丘・沖積地の3域に分かれる。



第15図　溜池と築造地形

また中位段丘面の溜池には、地形図上から埋没した谷状地や旧河道に構築されたと判読できるものと、そうとはみられないものとがある。

溜池の立地する地形と築造時期は必ずしも対応しないが、大まかには丘陵上で最初に構築が行われ、次いで中位段丘面に移る。また段丘面においては、埋没した谷状地や旧河道にあるものが



第16図 「佐野町場」周辺の溜池

位置	No	溜池名	① 1310年頃	② 1316年	③ 1689年	④ 1698年	⑤ 1699年	⑥ 1699年	⑦ 1699年	⑧ 1761年	⑨ 1762年	⑩ 江戸中期	⑪ 1791年	⑫ 1837年	⑬ 1837年	⑭ 年代不詳	構築段階
檀波羅丘陵上	1	北谷池				古				○					○		2
	2	郷之池				古				○					○		2
	3	大池				古				○					○		2
	4	十郎池				古				○							2
	5	山山池				古				○					○		2
	6	新池													○		4
	7	尼津池		○		古・新				○					○		1
	8	八重治池		○		古				○					○		1
	9	十二谷池	○	○		古				○					○		1
	10	山池				新											3
	11	質池				古											2
	12	小細利池			○											○	2
	13	中細利池					古										2
	14	大細利池			○		古									○	2
	15	乙の池						古									2
	16	新池						古									2
	17	山の池						古									2
	18	七池						古									2
	19	長池											○				4
	20	蕎池											○				4
樫井川以東の段丘・沖積地	21	白水池		○						○					○		1
	22	上田池								○	○			○			4
	23	穂波池									○			○			4
	24	今池												○			4
	25	貝の池								○	○			○			4
	26	角取池				古								○			2
	27	原池				古				○					○	○	2
	28	加護池										○		○		○	2
	29	庵ノ池										○		○			4
	30	松本池												○			4
	31	丹生池												○			4
	32	長戸池												○			4
	33	柚ノ池				古								○			2
	34	大池			○		古							○		○	2
	35	道之池		○?	○		古									○	2
	36	十蔵池			○		古									○	2
	37	新之池			○		新									○	3
	38	藤波池					古										2
	39	井原池			○		古									○	1 ?
	40	宮之池														○	2
	41	唐池			○											○	2
	42	布池			○		古									○	2
	43	調之池					古									○	2
	44	上三ヶ尻池			○		古									○	2
	45	三ヶ尻池			○		古									○	2
	46	末広池															4
	47	越中池			○											○	3 ?
	48	笠松池			○											○	3
	49	二ヶ池														○	4 ?
	50	中池			○		新									○	3
	51	加濃池			○		古										2
佐野川以東の段丘・沖積地	52	三念寺池							古								2
	53	かこ池							古								2
	54	牛池							古								2
	55	けち場池							古								2
	56	明堂池							古								2
	57	中山池							古								2
	58	中の池							古								2
	59	道の池							古								2

古・新：正保2年（1645）基準

① 日根荘日根野・井原両村荒野絵図
② 日根荘日根野村荒野絵図
③ 佐野村・湊村立会絵図
④ 泉州日根郡日根野村領池絵図
⑤ 泉州日根郡佐野村領池絵図
⑥ 泉州日根郡中庄三ヶ村池絵図
⑦ 泉州日根郡瓦屋領池絵図
⑧ 日根野村井川用水絵図
⑨ 俵屋新田山池溝手筋絵図
⑩ 俵屋新田谷合出井筋用水絵図
⑪ 中庄村荒所飽絵図
⑫ 長滝村絵図
⑬ 日根野村絵図
⑭ 佐野村用水絵図

表5 「佐野町場」周辺の溜池

そうでないものよりも先行するという傾向がおおまかには認められる。このことは、給水域の開発時期と関わっているが、溜池の取水方法によっても立地場所が規定されていると考えられる。

（2）溜池の構築年代比定

59箇所の溜池について、構築年代を知る手掛りとしてはまず「泉州日根郡日根野村領池絵図」、「泉州日根郡佐野村領池絵図」、「泉州日根郡中庄三ヶ村池絵図」、「泉州日根郡瓦屋村領池絵図」に示された「古」、「新」の表記があり、それによって構築が正保２年（1645）以前か以降であるかの峻別がつく。この表記は39箇所の溜池に記されている。このほか発掘調査や史料によっても構築年代を窺うことができるものもある。

発掘調査が実施されたものとしては、まず白水池があがる。この溜池は「日根荘日根野村荒野絵図」に描かれているので、正和５年（1316）には存在していた。さらに、文暦元年（1234）12月２日付「九条家文書」に記されている「泉池」がこの白水池であるとの指摘もあり、13世紀前半に遡る可能性がある。堤体内や堤下の旧地形の埋立て土からは瓦器が出土していて、13世紀代に築造されたことを裏付ける。

中池は「泉州日根郡佐野村領池絵図」に「新」と記された溜池であるが、堤体に設置された木樋から近世前期の遺物が出土していることから、17世紀後半に構築された可能性が高い。

末広池では、堤築造のための整地土から近世末～近代初頭の遺物が出土していて、溜池もその時期に構築されたとみられる。このことは、この末広池がいずれの絵図にも描かれていないことからも窺える。

溜池自体には発掘調査は及んでいないが、上田池では溜池周辺の整地土・耕作土に近世の遺物が包含されていることから、溜池構築を含めた地域開発は近世に行われたと考えられる。また、井原池は「泉州日根郡佐野村領池絵図」に「古」と記されていて、正保２年（1645）以前の構築であるが、周辺の耕作地が14世紀後半に開発され始めたといわれていて、その時期にまで構築が遡る可能性はある。とすれば、さらに14世紀前葉にまで遡って、「日根荘日根野村荒野絵図」に描かれている「野池」が該当するのかも知れない。

史料から構築年代を窺うことができる溜池には丹生池がある。「長滝村絵図」の裏書から文化12年（1815）に新築されたことが判明している。同様に、穂浪池は文化13年（1816）の新築とされている。しかし穂浪池については、宝暦12年（1762）作成の「俵屋新田山池溝手筋絵図」にすでに存在が表わされているので、文化13年の「新築」は、実際には改修・増築であった可能性がある。

ところで、食野家に残る永禄８年（1565）の「畠地売券」に三ッ池、天正元年（1573）の「田地売券」には越中池のこととみられる「エツケウノ池」の名がそれぞれ記されている。これに従うならば、両溜池は16世紀中葉には存在していたことになる。

ところが三ッ池は近世末以降に構築された末広池から、越中池は正保２年以降に構築された中池から取水している。このことは、両溜池が親池よりも遅れて構築された可能性を示唆する。

しかも三ッ池は、幕末から明治初頭に作成された可能性が指摘されている「佐野村用水絵図」にのみ存在が認められるのである。この点からも構築時期の新しさを予測することができよう。さらに、近世末以降に構築されたとみられる末広池もこの絵図にのみ存在が認められ、このことからも上述の点は補強できるといえる。したがって売券の記載年月日に作為があるか、あるいは現在の溜池とは異なるものであるのか、幾つかの可能があるが、少なくとも現在比定できる溜池の構築年代を示しているとは考え難い。

なお宮之池も「佐野村用水絵図」に存在が知られるのみなので、やはり近世後葉の構築であった可能性が高い。

このように、三ッ池と越中池は史料の内容をそのまま受け止めることが難しいが、それらを除くと絵図と発掘調査成果や史料との間に齟齬が認められることはなく、したがってそれぞれ描かれた絵図の製作年代が溜池構築年代の下限であると捉えることができる。

(3) 溜池構築の段階

発掘調査による成果、溜池が描かれている絵図の製作年代、そして絵図中で示された正保2年を基準とする「古」・「新」の表記をもとに、溜池の構築年代を求めると、大きく4段階を設定することができる。

第1段階は、13世紀後半から「日根荘日根野村荒野絵図」が描かれた正和5年（1316）の期間である。この段階で構築された溜池は5箇所であり、まだ少ない。また既述したように、檀波羅丘陵上に設けられたものが大半である。

このうち基幹となる十二谷池は尼津池と八重治池からの取水と、井川からの取水に依っていて、尼津池については雨山の自然水の集水に依っているとの指摘がある。一方、段丘面に設けられた白水池へは井川の余水が引かれている。主としてこの白水池と十二谷池によって檀波羅丘陵西麓への給水がなされた。

さらに「日根荘日根野村荒野絵図」に描かれた「野池」が井原池だとすれば、ここからも檀波羅丘陵西麓への給水が可能となる。なお「野池」という名称からすると、絵図の時期には天水や湧水を集積していたと考えられる。

第2段階は、14世紀中葉から正保2年（1645）までの期間である。この段階で構築されたとみられる溜池は34箇所と急増していて、総数の57.6％に及んでいる。しかも第1段階では大半が檀波羅丘陵上に設けられていたが、この段階になると溜池は各域に広がる。

まず檀波羅丘陵上にはなお多くの溜池が構築され続け、この段階で丘陵上の溜池の大半は出揃う。これに加えて、丘陵と樫井川の間の段丘面には15箇所、丘陵と佐野川の間の段丘面には8箇所の溜池が構築されている。ことに後者の範囲にあっては、溜池の構築はこの段階に限られている。

ただし、この段階の溜池数の多さは、300年間という長期間に及んでいることに起因している可能性がなくはない。しかし多くのものは、16世紀後葉～17世紀前半に集中して構築されたの

ではないかと推測する。

第３段階は、正保２年から「泉州日根郡佐野村領池絵図」、「泉州日根郡中庄三ヶ村池絵図」、「泉州日根郡瓦屋領池絵図」の製作された元禄12年（1699）までの期間である。この段階は半世紀にすぎないにもかかわらず、５箇所の溜池が構築されている。

しかも、檀波羅丘陵裾の山池を除くいずれもが「佐野町場」の南から西方面の日根野村北辺から佐野村南辺に当たる範囲に位置している点は注目される。これは、この時期の水田開発の指向範囲と密接に関わっている。

なお既述したように、越中池は天正元年（1573）の「田地売券」にその名称がみられるが、「泉州日根郡佐野村領池絵図」で「新」と記された中池から取水していること、そして「佐野町場」外縁部の水田化が17世紀後半以降であることから、この第３段階に位置付けるのが妥当であると考える。

第４段階は、18世紀以降、明治時代までの期間である。この段階の溜池は13箇所、総数の25.4％に及んでいて、第２段階に次ぐ溜池増加期である。このことを反映して、再び広範囲で構築されているが、大きくは３域に分けることができる。

ひとつは檀波羅丘陵上あるいはその裾部である。ただしこの範囲における数は少ない。いまひとつは白水池から熊野街道までの間であり、10箇所に及んでいる。したがってこの範囲の下流部が、第４段階の主要な開発域であったといえる。最後は「佐野町場」の西方であり、第３段階の溜池構築範囲に近接している。

この第４段階において溜池の構築が集中する白水池から熊野街道までの範囲の下流部、すなわち熊野街道より海側には、第２段階で既に多くの溜池が構築されていた。つまりこの段階の溜池構築は、既存の溜池の上流部でなされたのである。これとは逆に、「佐野町場」の西方の溜池は、第３段階の溜池の下流部に位置している。

なお三ヶ池については、既述したように永禄８年の「畠地売券」にその名がみられるものの、近世末以降の構築と考えられる末広池から導水していることから、この段階に位置付けるのが妥当であると考える。

つまりこの第４段階においては、白水池から熊野街道までの範囲でも、また「佐野町場」の西方においても、既存の溜池と水路に重ねて、新たな溜池と水路を加えることによって、既に開発された水田域の生産性の向上が目指されたと考えられる。

このように、溜池の構築には４段階があること、水田開発を進める範囲に対応して構築場所が設定されたことを推定できた。各段階の水田開発域とその状況については次節で述べるが、ここで確認しておきたい点は「佐野町場」外縁部における水田化の遅れである。発掘調査の成果から、その範囲における水田化は17世紀後半以降であるとみられ、その範囲に給水する溜池の構築も17世紀後半である。この時期になって「佐野町場」周辺では、新たな水田開発の推進がなされたことをその外縁部の状況から窺うことができるのである。

4 「佐野町場」周辺の水田開発

(1) 溜池構築からみる水田開発の段階

先述したように溜池構築について4段階を設定したが、これに対応して水田開発も段階ごとに進展したとみることができる。

第1段階では、十二谷池などの檀波羅丘陵上の溜池や、白水池、そして推定ながら井原池からの給水によって、檀波羅丘陵西麓の水田開発が進められたと考えることができる。これは「日根荘日根野村荒野絵図」に示されているとおりであるが、加えて同絵図では上之郷の樫井川東岸域もまた既耕地となっている。おそらくここには、井川と十二谷池を結ぶ水路の余水が供給されたのではないかと推測する。

広い範囲で溜池が構築される第2段階になって、この地域の基本的な水利が完成した。ことに檀波羅丘陵上と熊野街道周辺の溜池からの水路によって、日根野村、佐野村、長滝村などの水田へ広く給水することが可能となった。

17世紀中～後葉に、この地域では新田開発が進められるが、それに先行するこの段階における溜池整備が新田開発を可能とするための前提であったと捉えることができる。

第3段階は、主として「佐野町場」の南西から西にかけての範囲で水田開発が進められた。正保2年には俵屋新田が起工されているが、そうした新たな開発の波がこの時期に「佐野町場」外縁部に及んだといえる。この段階になって「佐野町場」周辺の水田開発は、面的にほぼ完了したことになる。

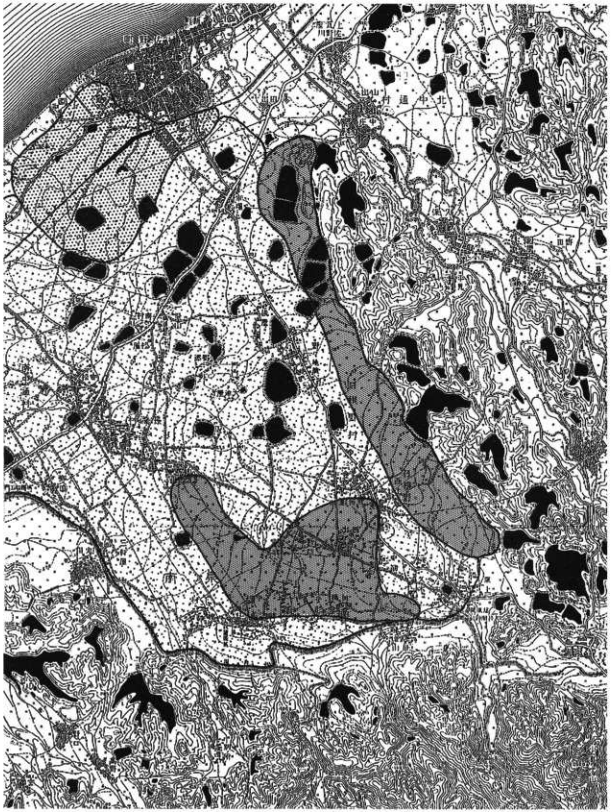
ことにこの段階に構築された溜池でも重要なのが、新之池と中池である。新之池は第2段階で構築された十蔵池・道之池・大池から取水し、中池および笠松池に給水している。中池は新之池から取水したのち、越中池と笠松池に給水している。この複数にまたがる溜池の集水によって「佐野町場」の南西から西方面にかけての水利が整ったのである。

なお新之池が構築される前段階においては、十蔵池・道之池・大池からの水利は、羽倉崎から嘉祥寺方面のためであり、「佐野町場」の南西から西方面へ給水するものではなかった。

第4段階では、新たに面的な水田開発を進めるというよりは、水田化の遅れていた部分的な場所の開発を目指すとともに、既存の水田の生産向上を目的として、溜池と水路の整備がなされたと考えられる。ことに白水池から熊野街道の間における溜池の増加は、天保8年（1837）作成の「長滝村絵図」に溜池の存在が示されているように、長滝村領地内の開発が中心であったと推測できる。

このようにみると、第2段階がこの地域の水田開発にとって特に重要であった。しかも、この段階の溜池新設によって17世紀中～後葉の新田開発が推進されたことを勘案すれば、第2段階の期間にあっても16世紀後葉～17世紀前半に溜池が急増したと推定することができる。

なお本調査地における水田開発は、第3段階に該当する。



第17図 「佐野町場」周辺の水田開発の段階

図　版

図版１　遺構全景

１　第１面全景（西から）　２　第１面全景（東から）　３　第２面全景（北から）

図版２　遺構・土層

１　溝１・小穴１全景（東から）　２　溝２・３全景（東から）　３　溝１土層断面（西から）

４　小穴１土層断面（西から）　５　調査地東壁土層（西から）　６　調査地北壁土層（南から）

７　調査地南壁東半土層（北から）　８　調査地南壁西半土層（北から）

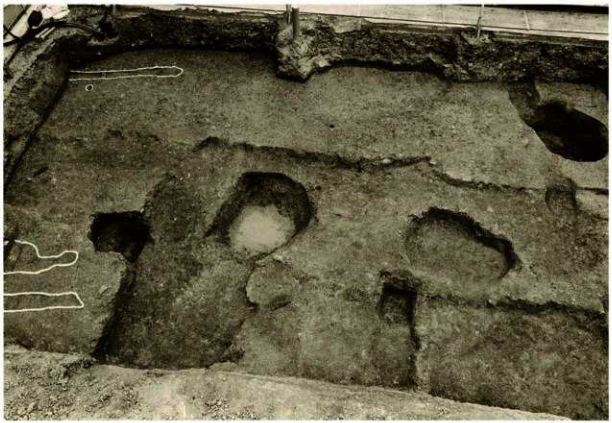
図版３　出土遺物

１　磁器　２　陶器・鉄製品・石製品

図版1　遺構全景

1　第1面全景（西から）

2　第1面全景（東から）



3　第2面全景（北から）

図版2　遺構・土層

1　溝1・小穴1全景（東から）

2　溝2・3全景（東から）

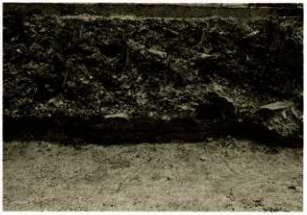
3　溝1土層断面（西から）

4　小穴1土層断面（西から）

5　調査地東壁土層（西から）

6　調査地北壁土層（南から）

7　調査地南壁東半土層（北から）



8　調査地南壁西半土層（北から）

図版3　出土遺物

1　磁器

2　陶器・鉄製品・石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	わかみやいせき
書名	若宮遺跡
副書名	泉佐野駅前交番新築工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２００９－５
編著者名	三木　弘
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目 TEL　06－6941－0351(代)
発行年月日	2009年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかみやいせき 若宮遺跡	いずみさのし 泉佐野市 １１９２番地	27213	83	34° 24′ 39″	135° 19′ 02″	2009年５月	90	泉佐野駅前交番新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみやいせき 若宮遺跡	生産城	近世	畦、側溝、耕作痕	磁器、陶器、鉄製品、石製品	水田耕作に伴う遺構を検出した。

要約	若宮遺跡は、泉州において近世に繁栄を誇った「佐野町場」およびその周辺城が該当している。「佐野町場」は孝子越街道沿いに形成された宿場町である。 今回の調査地点は遺跡の南端に位置していて、街道や宿場からは離れている。こうした宿場はずれの地点では、17世紀後半から18世紀にかけて水田化が進められた。調査で検出された畦、側溝、耕作痕がこの状況を示している。耕作土からは17世紀後半から19世紀初頭に比定できる磁器が出土していて、この期間中に水田耕作が行われていたことが判明した。 磁器は、肥前系、波佐見・平戸系が主なものであるが、1点だが中国製染付が出土した。また陶器の主流は京焼系であるが、堺焼擂鉢も認められた。 調査地周辺は、中世日根荘以来の地域開発および「佐野町場」の形成と関連しつつ、水田化が進められたのである。

大阪府埋蔵文化財調査報告２００９－５

若宮遺跡

―泉佐野駅前交番新築工事に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成21年12月25日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号